是以上の恐ろしい事實でございます。

魔の淵へ

私は密航婦の事を調べる初めは、まるで取調の見當がつきませんので、先づ或る刑事から種々の話を聞きました。

假に女の名をお雪とします。お雪はまだ二十歳でしたが、モウ人の妻で、一人の可愛い子までありました。四國の西條といふ港の者でしたが、一夜何の事からか、夫と口で爭ひをしたのです。出てゆけ、善矣出てゆく、かういふ事はよく申す事で、お雪はふッと外に出ると、薄明るい月夜でございます。ふら〳〵と氣の向くまゝ港の町を歩きました。通り魔とでも申すのか、此時許りは氣がふら〳〵してゐたのです。すると見も知らぬ男に逢ひました。此男が調子のよい人で馴々しく話しかけるので、ツイうか〳〵と夫と喧嘩した事

まで言つて了ひました。『そんな事なら神戸にいつてお茶屋奉公をしてはドウだ、お前さんのやうな容貌をもつて田舍に燻ぶるのは惜しいものだ』と金の儲かる話をして說落しました。お雪もツイ其氣になつて『では家に歸つて着物を着替へて來よう』といふのを、『ナニ神戸へ着いたら着物は直ぐ美くしいのを着せてあげる』と言葉巧みに船の中に連込みました。モウ駄目です、此船は惡魔の船です、氣がふら〳〵したのがモウ魔の淵へ陷つた時でした。神戸の旅館みたいな西洋館の一間に入れられるとソコには四五人の年若い婦人がゐて、何も知らないやうにハッ〳〵笑つてゐました。これを見てお雪はハッと思つたのです。あゝ失敗つた事をした、と思つたが駄目、モウ入口にはピンと錠が下りて短銃を持つた男が張番をしてゐました。もう泣いても追付きません。

探偵小説

話は進行させます。暗夜の汽船、艙庫の中に五六人の婦人は放り込まれました。船員が受取る時に一匹二匹と數へたさうです。船は動く、お雪の乳は張つてきます、あゝ夫が戀しい、子供が戀しい、然し既に萬事休矣。

毎日六人に麥酒瓶に一本の水と、一人にパン一個が一日の食糧でした。船の中では種々悲慘な事があります。三日も四日も婦人の群は泣き叫んでゐましたが、大きな汽船の底ですもの、聲は通りません、日の光といふは一つの丸窓から射すばかり、餘り泣くと船員が來て手酷い目に會はせます。其うちに一人の婦人は絶食して遂々死んで了ひました。死んだといふ事を訴へても船員は相手にしてくれない、夏の事で二三日すると、死人の不快な臭ひが室に滿ち漂う

てきました。これには船員も閉口したと見えて、風黑き夜『ソレ水葬だ』といつて大海の中に投込んで了つたのであります。何といふ悲慘な運命でせう、まるで西洋の探偵小説にでもありさうな話ではありませんか。

船は新嘉坡の波止場に着きましたが、餘程手段が巧みだと見えて、うまく官憲の目を免れて或る家に伴れ込まれたのです。これからはモウお話にもなりません。操を賣らなければならぬ、イヤ强られるので室の入口には黑奴が短銃を持つて突立つてゐるのです。お雪は一年と二ヶ月の間、鐵の棒で圍まれた室で暮しました。惡魔の腹を肥す料になりました。中には虎の檻のやうな箱に入れられて、黑奴に賣られ南洋にゆく婦人もありました。

お雪は再三逃げかけたが駄目です。五度目に黑奴の隙を見て、高

い三階の窓から往來めがけて飛び下りたのです。『ふるあめりかに袖はぬらさじ』彼女は寧そ死んだ方が？と思つたのでせう。飛下りた時は、モウ身は粉になつてゐると思ひの外、女の一念は恐ろしいものでバタ〳〵と駈出しました。盲滅法に、後からは十四五人の黒奴が手に手に短銃を持つてポン〳〵お雪を射撃し乍ら追掛けてきますお雪の命はもう風前の燈です。

呪うべきものは

絶體絶命、お雪は日本の領事館があるかドウか、そんな事は知りません。一つの西洋館に飛込んでたゞ泣き、且つ手を合せて西洋人を拜んだのです、主人も風采からして日本の醜業婦だとは思ひましたが、拜むものですから何か仔細があらうと思つて一室に通すと、外には追手か押掛けて來て、強硬な談判をやつてゐるのです、主人

は日本の領事がくるまでは返さないといつて承知しません。

軈て久水領事は此家の主人から電話で仔細を知りました。早速館員を馬車でやつて、お雪を引取りましたが、途中でも短銃が亂射されて危險だからお雪は馬車の床に寢てゐたのでした。惡魔どもはお雪の逃げる事よりも、自分等の内幕がお雪の口から漏れるのを恐れてゐるのです、だからお雪を殺さうとしてゐるのです。辛うじて領事館の一室に入りまして仔細を久水領事と夫人の前で涙ながらに話しました。それから小間使をして働きましたがドウしてもお雪を送り返す機會がないのです。トいふのは惡魔どもは交代で領事館の附近を警戒し、お雪の姿が見えると一發ズドンとやらうと構へてゐるのですから。

漸う領事夫妻が歸國の機會が參りました。船の中で：お雪は室か

ら出ません。絶えず一人の日本人が狙つてゐるのですもの、上海に着いたからモウ悪魔も退散するであらうと思ひの外、又上海から入替つて一人の日本人が乗込んで横濱に着くまでは、お雪の周圍から離れませんでした。漸々の事でお雪は情ある久水夫人の手で、夢にも忘れなかつた四國の故郷に歸り、夫と子供の顔を見る事が出來ましたが、佛壇にはお雪は死んだものとして位牌があつたといふ事であります。

お雪は幸ひにして生還する事が出來ましたが、他の不幸な婦人の群は、どんな生涯を送るでせう。皆樣の御想像に任せる外はありません。こんな苦しい目に合ふのも、ふら〳〵した一瞬の心のまどひと、それと虚榮心であります。惡魔を呪ふのは無論ですが、此虚榮と心のまどひも亦呪ふべきものではありますまいか。

樺太お玉

芝二本榎の五人殺しは珍らしい刑事事件として天下を騒がせた、引つゞいて三人殺し、都合八人殺した犯人は、鳶の者荒内鎌太郎といふ事が判つた。

その日、私の『日日』では直ぐ電報で家族五人を殺された在函館の上川丸船長工藤嘉三郎氏に宛てゝ犯人就縛の事と犯人の姓名等を知らせてやつた。すると折返して工藤氏から『ゴコウイヲカンシャス』といふ返電がきた。――その夜、私は樺太お玉に會つたのである。

それは葭町の百尺だつたと思ふ。二三人で會飲してゐたので、話は其日の大きい出來事として犯人就縛の事から春に遡つて、五人殺し當時の事、親子地藏の事まで夫れからそれへとはづんだ。

『私も親子地藏へ昨日おまゐりしましたの、少し心願の筋がありましてね』とお玉がいふ。——お玉といふのは藝名ではない本名、色の淺黑い目のつれた脊の高い女。——その心願の筋を聞かうと一座の者は囃し立てたがお玉は何とも云はなかつた。

其後二三年經つてから私はひよつこり向島の土手で彼に會つた。そして彼の今の生活を知ると共に芝居の總見の義理やら、松茸めしのをごりつこやら私の友達やらお玉の友人が交際にからんで話が賑やかになつた。斷はつて置くが次の話は私が聞き蒐めた彼の半生涯の筋書だけである。

芝で生れて神田で育ち——彼は柳橋で半玉となつて出た。その時には實の父母はなかつた。戸籍謄本をその時始めて見て養女となつてゐることを知つた。後になつて實の弟が淺草橋のほとりで小間物店

を開いてゐたので、實の親は芝で鰹節屋をやつてゐたといふ事を朦氣に知つた位である。

柳橋で札ッぴらを切つては藝妓を玩具にする客がむやみに癪に障つて、自分へ魔手が及ばうとした時に、痰疝を切つたのが病みつき、まだ十八のやつと一本になりたてのほや〳〵が、一つは面あてに、一つは美しい戀ごゝろに向河岸の吉ちやんに達引いたのが原因で横濱へすみ替へるやうになつた。これが江戸を離れて樺太三界まで流れ歩く振出しであつた。

それから淺草にゐる養父母のところへ歸つてきた。母親はごもくのお師匠さん——ごもくといふのは御承知でもあらうが、唄なら何でも一寸間に合ふやうに敎へる師匠の事です——横濱で身うけを去る貿易商にされはされたが、東京の生活が戀しうて淺草に歸つてぶら

ぶら遊んでゐた。もう其頃の彼の味覺は鋭利になつてゐた、東京以外の土地の鹽加減は彼の舌には合はなかつた、甘いものでも他所の毒々しい甘いものは彼の舌を喜ばせなかつた。――彼は東京へ歸るが否や、舌を喜ばせる事と肌を喜ばせる事を忘れなかつた。氣に入つたものを着た。同じ柔かいものでも自分の目に親しみのある柄の方が肌につけ心地がよかつた。彼は何も彼も忘れてぶら〳〵遊び歩いた。芝居といふ芝居は見て歩いた。そして借金――とう〳〵仙臺へ落ることになつた。

『食ひしんぼう、この舌一枚のために又都落か』と何だか自分で自分の身が憐れまれたが、まゝよ浮世は三ぷん五りん、仙臺では自暴も手傳つたが隨分世間にすれてゐた、抱主の萬屋といふ藝妓屋の息子が手を出したのが、もつけの幸ひ、ぷいとドロンを極めて函館へ渡

つて了つた。もう彼女渡り鳥の呼吸を覺えてかゝつた。

函館でも又舌の爲めに苦勞をした。東京の空氣に觸れたさに隨分無理な事もした。とう〳〵西劵から宇多子といふ名で出た。

『この頃の事ですよ。上川丸、船長さんを知つたのは、工藤さん、あの方をね』

役者買ひ、情夫、いろ〳〵道樂を覺えた、併しいつも〳〵東京の憧れはあつた。さうした道樂にも江戸氣質ともいふべきものが附き纏つてゐた。

また函館落、二年と經たない間に借金をして自分が主人の藝妓屋もたゝみ、そつと夜逃げをした。函館から船に乘つては追手が掛るといふので小樽まで汽車、懷ろにはモウ幾らもない。樺太の漁場にゐるあまい客から旅費をせしめて東京へ歸らうといふ寸法。

『そこへ都合のいゝ事には上川丸が樺太へ出帆するといふぢやありませんか、渡りに船とはこの事、早速工藤さんに頼んで特別に乘せて貰ふ事にしましたの』

船には時の平岡長官の一行が乘つてゐた。その一行の中にSいふ事務官がゐたが此人の肌合ひがさつぱりして氣に入つて了つた。

『船に醉うてうん〳〵呻き乍らも人に惚れる事は忘れませんからね、それに其Sといふ人が馬鹿に親切にしてくれるでせう、變な氣にならうぢやありませんか』

眞岡着、それから志すティヤと云ふ漁場までいつた。途中で親切さうなお婆さんに話しかけられて、うつかり此家に寄ると大きな遊女屋で『お前さんも一つ稼いでは』などゝ凄く出られて逃出したな

どの道草もあつた。

ティヤといふ漁場に三井といふ旦那をたづねていつた。ロシヤ人が經營してゐた處なので總てがロシヤ式家から器具までさうであつた、ところが三井の處には自分より先にひとりの女がいつてゐた、山縣かねといふ函館で有名な高等内侍で凄い程美くしい女だつた、少し若白髮があつたが、夫れを染めて化粧をすると女でも見惚れる程美くしかつた。

其お兼はお玉を見るとイヤな顏をして毎日辛くあたり出した。鰊を干すやら、數を讀むやら、女ふたりも漁場の手傳ひをしてゐたが、ふたりは事毎に衝突した。

『そこで私も云つたンですよ、ねエお兼さん、私だつて江戸の者だ さつぱり言つて了ひますがね、お前さんはこゝへ慾で來てるの、そ

れとも色氣で來てるの、一寸私に聞かせておくんな。私は何も色の戀のといつて來たんぢやないから、お前さんの氣さへ知れたら、きれいさつぱり讓りますよ、とかう云つてやると面白いぢやありませんか、其女もね、さうさつぱり出られると私も言つて了ひますが、實は少し金が欲しいものだからと本音を吹いて了つたのです、それなら夫れのやうに何とか早く片付けやうぢやないか、今年は鰊も不漁のやうだから案外アテが外れるかも知れないよ、といふ事になつて了ひました。」

愈々ふたりとも逃げ出すといふ事になつて、金庫から印紙を二百圓許り引出して、窓からそつと外へ出ると月夜で雪がぎら〳〵光つてゐる。ふたりは逃げた、雪の上を逃げた、三里の間、雪の上をふたりは無散に逃げた。

漸う眞岡へ辿りついて、それから大泊へ船でいつた。お兼は印紙を賣つて函館へかへる、お玉は豐原にいつた、それは船で會つたS事務官を思ひ出したので。

宿から使を出すとSがきた。十日二十日とぐづ〳〵してゐる間に遊んでゐても退屈だからといふので又藝妓に出た。江戸藝妓の評判は高くなつた、それにお玉のさつぱりした氣前と齒切れのいゝ言葉よは、山師の多い樺太では喜ばれた。「ハレー彗星」といふ渾名も彼の爲めに出來た。彼は彗星の如く出沒して、氣の向いた座敷でなければ決して出なかつた。

日本水産會社の樺太出張所の或る男に身うけされた。それから捕鯨船に乘せられた。

『ねエ、振つてるぢやありませんか、捕鯨船に乘つて海の上で毎日

暮すなんテ、變れば變るものだと自分で自分の身が面白くなつて來ましたよ、船には諸威人が砲手で乘つてゐましたが、私は始めのうちは鯨を射撃ごとにびく〳〵しました、それでも後には馴れて平氣で追分を唄うやうになりました、荒海で向うに鯨の浮き沈みするのを見乍ら哥澤でもありますまい、やつぱり海の上では追分ですよ、私は毎晩追分を唄つては皆を喜ばせてやりました』

暗轉。

『考へてみれば馬鹿々々しい、東京、東京に限ります、矢も楯も堪らなくなつて、船が函館に入るか否や、すたこら〳〵東京へ歸つてきましたよ。その身うけしてくれた人も船のりですからね、腹は大きいから安心なものです』

そして彼は東京に歸つて、相變らず味覺の滿足を得た後は、葭町

から左褄。

『私も親子地藏へ參りましたの、心願の筋がありましてね』と、あの夜、百尺で私に云つた心願の筋は、この筋書の通り、彼は樺太へ渡して貰つた工藤氏の恩を忘れずに、親子地藏の冥福を祈るものと知るべし。

向島で私が會つた頃から、母親ゆづりのごもくの師匠——本場で鍛へたゞけに、追分はお弟子に喜ばれるさうです。

火事の晩、私が通りかゝつて飛込むと荷物は運び出して空地に積み、お玉はその番人、姉さん被りをしてゐるから、『ごたいさうな風だね』と聞けば、『江戸の女は火の粉で髪を燒かぬものです』とさ。

後に聞いた話だがお玉の家の方へ火の手が廻らなくなつたと見るや

彼はもういゝ氣になつて覺えず端唄を小聲に唄ひ出したら、隣りにゐたお婆さんに暢氣過ると怒られたさうである。

樺太お玉とは誰がつけた異名やら、葭町あたりや淺草界隈では知る人ぞ知る。襟足の美くしいすつきりしたお玉の姿が見たいなら、毎朝、六時から七時の間、雨が降つても日が照つても、待乳山の聖天樣へお參りをしてゐますから。

これが江戸から追出されて、味覺の爲めに又江戸に吸ひ寄せられた二十七、丑年の女。――隨分達引やら江戸前の嬉しい話はあるが、それは後日を期したい。

女優熱

一

女優といふ言葉が喧ましく唱へられるやうになつたのは近頃の事に屬する。夫れまでは女役者として三崎座や市川九女八などが、珍らしがられてゐた位に止まつてゐた。川上音二郎がマダム貞奴を舞臺に出す女形は女優でなければならぬといふやうな議論が出る漸々女優といふものが現はれて來たが未だ〳〵社會に認められてはゐなかつた。本庄幽蘭といふやうな變な女まで飛出し葛城文子とか佐藤露英(田村とし子)なども舞臺に出たが猶社會は之を氣紛れ女と視てゐた。處が貞奴が女優募集を始むるや忽ち之れが社會の問題となつた其導火線は森律子で代議士の娘、跡見女學校出身といふやうな身分

から盛んに攻撃され一方では盛んに激勵された。此時の一期生が帝國劇場の手に移される、他方では坪内博士が松井須磨子などを養成する、夫等の女優が舞臺に出て花々しい成功を收むるとさア世間の若い男女の血は湧き立つて女優渴仰熱は一時に是等女優の身邊に集まつてきた。中にも森律子は問題の女となつたゞけに女優熱の焦點になつて毎日女優にしてくれの小間使か下女にしてくれ夫れでなければ死にますなどいふ手紙が十四五本づゝ舞込んでくる、若い男からは歡心を買ふやうな手紙や批評が來る、殆んど應接に忙しい程で手紙ではまどろッこいといふ連中はわざ〳〵律子の後を追かけて面會を求むる、女優熱は獨り東京のみでなくて全國到る處に蔓延し中にも關西地方が最も甚だしく家を飛出して律子の許にやつてくる者すらある。事は東京以外に亘るけれども東京の女優が如何に地方の

女に渴仰されてゐるか又其女優は如何なる生活をしてゐるかを觀るのも無駄ではあるまい。先づ律子嬢に宛てゝ來た手紙のうちで面白いものを掲げる、姓名は無論變名にした、律子の話に依ると女學校を中途で退つた者が多いさうで手紙にも御定りの形容澤山の文字が長々と連ねてある。开麼ところは中略とする。

（前略）私は親に死別れ兄上と共に叔父の家に居りますが幼少より芝居がすきで心にちかひましたのは我が行く末はきつと女優として世に一名をあげやうと思つたのであります、叔父の家で一生(縣)懸命に働いて居りますも思ふやうになりません。私は女優となる事ができませんでしたら長く此世に居らぬ心です、貴女樣のやうな貴い御方にこの樣な事を願ひますのは失禮でございますが貴女樣

大和國高市郡天滿村　花田宮乃

の門人にして下さいませんか、どのやうなつらい事でもしんぼう致します、然し叔父は女優になることを許して下さいませんが私はたとへ親類の者が何と言ひませうときつとなります。定めて引受人がなけな門人にはして下さいませんでせうか、病めば知らせたら知らん顔して居られませんでせう(下略)

無論採用はしない、律子は保護者の許可を得ぬものは皆頭から斷つてゐる。

二

女優熱に浮かされてゐるのは女學校などに學んだ者計りではない下女にまで及んでゐるのである、左の手紙は同じ家に奉公してゐる下女が一通づゝ手紙を認めて同封の上森律子に送つたものである。

下谷谷中清水町白佐方　谷木ふみ

私は谷木ふみと申しますものでございますが良信(兩親)はなくなりましておば一人おりますが私は女優になりたくゆえあなた樣のお出し(弟子)にしていたゞき度候申し(若し)出きませんならば私は此世にいきてるかひがございません、どうぞふびんと思召下され度候

私は當年十七でございます

實に世間には安い命が多いことよ、前回は大和國の少女が女優になれぬなら、死ぬるといふし又茲にも一人飛出した、律子も定めし命を持て餘したに違ひない。

(前略)新聞紙上にてあなた樣のおうわさを度々聞いて居りますが私は上州高崎の者でございます只今谷中に奉公して居りますが女優になりたく日々用もろく〳〵手につきませんどうぞ私をぜひあ

同家内　富川民子

なた様の女中にお使ひ下され行く末弟子にせひしていたゞきたいのです若し弟子にして下さいませんければ此世にいきてゐるかひがございませんから死ぬつもりにてかくごをして居り升くれ〳〵も願ひます私の年は二十歳で實はお伺ひしたいのですが少し都合が悪くございい升から何れ其うち御伺ひします。

又命の不用な女が現はれた、死ぬつもりで覺悟をしてゐるとまで迫つてきた、こんな女はどんなにか律子の返事を待つ事であらう。

牛込HT生

花は散る、春は逝く。時は流れ、日は輪る。さらば君よ！永遠は果して何れの日にか現はる？

近代の潮の寄する渚に立てる哀なる女よ！願はくは榮光と幸福との波を浴びよ！

なかには恁麼ハガキも交つてゐる。これは男のハイカラ、女のハイカラの手紙は又次の如く變つてゐるが是等は單に同情者に過ぎない。

芝伊皿子町　月岬の乙女

（前略）まアあの御美しいアレ律子さん？て連の人が口を揃へて申しました、家へ歸りましたのが十二時近く、夫れから電燈を消してもまだ……寢たと思つてゐますと不意に按針の御嫁さんの事を思ひ出しましてオホ、、、（中略）私の家は江戸名所の一つと申します月の岬品海を一目に見下して景色のよい處でございます、御暇もありましたら御出で下さいましな、伊皿子で佐倉とお尋ね下さればわかります。

次は看護婦らしい女の女優志願文を掲げる、呼ぶに森律子閣下を

以てす、閣下も驚いたらう。

芝○○○院内　川田てる

△勤んで書を森律子嬢閣下に呈す、柳は緑、花は紅の候と相成り候

(中略)私は千葉縣の者に候へどもいかにも女優にならんと思ひ居り候ひしが父が或る事より致して自分の思ひし事も水の泡と相成り殘念に思ひ居り候然る處友人の勸めにてこゝに少しの間居り候處友人より閣下の名聲を聞きいかにも致して君の御袖にすがらんと思ひこゝに一書を呈す次第に候若し閣下御世話下さるとならば早速閣下の御家へ下女となりても閣下のおひまに御教育下されば成功のあかつきは出來うる限り致すますから何卒願上候私は藝は何も出來ませんが願上候。

三

北海道函館區臺場町　八日市秋子

(前略)幾ら苦勞を致しましてもけつしていとわないのですから何卒此間あげました手紙の通私は少しも心はかわらないのですからふびんと思ひお情を持まして御返事下さい、毎日〳〵御手紙を待て一ばんでもねたことはありませんよ。

一寸讀むと男に心のたけを打明けて色よい返事を待つやうだが此は开麼浮氣ぢやない、一生懸命に律子の返事を待つてゐるのであるが律子の方では一々返事を書き切れないで弱つてゐる。

麹町上二番町藤方　野菊子

春風花信を傳へ來り候今拜顔致さず候へども貴嬢の御名の高き事諸新聞紙上にて拜見致し居り候へども私事もとより音樂の希望を抱き居りしが家事の都合にて殘念ながら出來申さず只今は奉公す

る身と相成りまことにつまらぬ生涯を送り居り候(中略)女優にでもなりて身を立て實母につかへたく思ひ居り候へども今は遠く相はなれ居り候へば致し方御座なく、一日として泣かざる事なく過し居り候何卒私の心も御くみ給ひて御同情の程偏に願ひ申候誠に御手數ながら規則と金は何程入るものか御一報被下度候(下略)

此女などは幾分かフラついてゐる、フラつくと言へば前々から掲げたのにもしつかりした手紙はないが多い中には偶ある、其一例

長崎縣西彼杵郡深堀村　高島あき

(前略)今日にても上京致さんかと存じ候も何事もよく〳〵合點致し居らざれば後に路頭に迷ふ事のなきにも限られぬこと一足ふみ出せば四面やみ、一方には一人なりともより多く身内の人の同意を求めたくいざといふ時何とか言譯の立つことと存じあれやこれや

と心をくだき居り申し候私は二十一歳の今日まで思ふがまゝの我身と存じ居り申候もいざとなればあれやこれやなか〳〵にたゞの世の中と違つて四苦八苦致し居り申候同じ志の方にも私如きお苦しみのあらせらるおん方の在するかなど考て愈我身うらめしう存ぜられ候未だ何人にも打明話致し居り申さず候、されど今直ぐ兩親の承知を得る事出來ず(中略)

と記し誰か身うちの者を頼むつもりなれど兎に角御世話を乞ふ、夫れに就きても參考までに聞き度しとて箇條を擧げて手當、病氣の時、素養、宿舍の事を問ひ最後に容貌の事を訊ねてゐる。

女優たるの見込なきものは免除すと有之候がそは素養の有無に有之候や體格なら私は身長五尺一寸位體格やせて全く田舍育ちの宛がらかしの木の如くノッポーの方にて候眼はくぢらの眼の如く小

さく顔面も小さく、とても侍女もつとまりかぬるかのやうかねがね假裝會の時に評され口惜しさなか〳〵骨にしみ入り候

これだけ己を知り乍ら猶女優といふ名に憧れてゐる、やつぱり女だ。

四

女優といふ名に憧れてゐる多くの女の中には己れを知つてゐる者もある、そんなのは森律子の手紙を得たり寫眞や繪ハガキを貰つて僅に燃えさかる女優熱を壓へてゐる、左に掲ぐる手紙の主は何の希望もなく寂しい境遇に在る女性で母と姉と親子三人ぐらし、何でも氣の毒な事情があるらしく律子に同情を求めて來た、そこで返事と寫眞とを送つたところが此の手紙、寂しい生活のなかでも如何に花やかな生活に憧れてゐるかを窺ふ事が出來る。

府下南多摩郡下恩方村　村見とり

（前略）日頃胸にあまる悶えを抱きて獨り淋しく暮す身には何の慰藉も滿足とてもなく唯々その日〳〵訪るゝ新聞に僅に鬱を散じ居り候、斯る時氣高き御姿取出だし舞臺の上の貴女樣の御樣子いろいろと想像致し候ては晴やかなる心持になり申候實に東洋一なる劇場に最も優秀なる技藝と容貌とを有さるゝ貴女樣より御情深き御言葉を給はりし事いかばかりか嬉しく忝なく存じ候をや妾は切に心より感謝致し候今日は雪さへ積りて薄くらき家の中に姉の身を思ひつゝ親子三人いつ晴るゝともなき曇り顔にて味氣なく暮し居り候（下略）

一女優の手紙を得て如何に隨喜の涙を滴したことか、此手紙の片でも彼の女中君や看護婦君閣下に呈したらお守にして喜ぶに相違な

い、律子曰く『男の方からも御手紙が參りますの、中には匿名で私の初舞臺の時から毎興行毎の御批評下さる方があります、樂屋で稽古し乍ら先生方に其手紙を見せますとよくも根氣よく見たものだ幾らか當つてゐる處もあると申されました、夫れは〳〵御贔屓にして下さる方がありますのよ』と、一人の女優を取卷いてわい〳〵騷いでゐる男の贔屓客の心々を割つて見たら隨分面白からう、そこで手紙を一本。

牛込わせだ町△△館　畑代眞

明四月一日午後六時頃帝劇にまゐり申すべく候間其節御手許まで名刺差出し申し候につき何卒一瞬間なりとも御面會被下度願上候二等席あたりにて謹んで御技演を拜見致すべく是非とも御面謁を願上候(三月三十一日深更)

何の爲めに所謂御面謁をするのだらう、其一瞬間に何事を語らうといふのであらう、人の心を知るよしもないが若い男が女優の一瞥を什麼に光榮に思つてゐるか此手紙の僅な文字の中にも躍如として ゐる、二等席の隅に陣取つて舞臺の上の律子からチラリとでも視線を向けられたら夫れこそ『願はくば榮光と幸福との波を浴びよ』といふやうな狂熱的な文句を連ねて芝神谷町の『森』と書いた郵便函を一ぱいにするに違ひない、が帝劇では斷然演伎中は面會を許さない、此男も一瞬間の御面謁が出來なかつたのは無論である。

五

女優志願の手紙はザッとこれだけとしてサテ夫れ程婦女子に渴仰されてゐる女優なるものは什麼生活をしてゐるか、それ程所謂理想的の職業で人が思う程愉快なものであるかを調べて見たい、夫れに

は先づ女優の日記を拔萃して先づ表面だけでも其日々々の有樣を見なければならぬ、今茲に森律子嬢より屆いた日記を掲載する、但し表面の日記である。

日記のぬきほ(一)

森　律子

▲七月十六日(火曜)晴　いよ〳〵左小刀の京人形の番となる、氣にかゝりうつつにもオチヨボ、チヨボ〳〵と口ぐせの樣子、起きては又姿見の前に幾度か、今更恐ろしい樣な嬉しい樣な何處かこそばい樣な心地がする。今日は知人の方も澤山に御見物下さるとの事電話のベルは朝からせはしさうになりつゞけてゐる。人形の寫眞をとるとていつもより早目に樂屋入り、殊更頰紅の色もさえて心地よし、箱の中に入れられし間の其暑さ汗は誠に流れるやう、いつか夢中の內に幕となる、贈られたる大花籠の花の香は廣き舞臺に滿ちてゐる、

ダンスだけは助かりしも御湯より出でゝ食事する間もなく夜興行の二丁にあせられ、澤井の役にて今日はマチネーと二度の水入り、飛込めば雨降ればたゞわけもなく喜ばれる見物の方々、帝劇には珍らしくも賑やかと思へばけふは七月十六日、鬘衣裳ごと濡れ鼠になつて瀧壺のぬけ穴より舞臺裏に這ひ上ればわざ〳〵夫れを見に來られて『鮑はいくつとれましたか』抔と聞かるゝは例の御口の惡い御方方、けふは怪我もなく無事にすむ、しばらく休んで菩薩のこしらへにかゝる、舞臺には踊るうち背に負ふ羅の輪が隣の御方のともつれ引けば引かるゝおかしさ、思はず笑ひ出せしと跡にて御閻魔樣より大きなカスを頂く。歸宅する、直につかれて休む。(註に曰く御閻魔樣とは或監督者の渾名でカスとは叱言の事なり)

八月八日(木曜)はれ　先帝の御十日祭なれば早く起きて御眞影に供

ふる清き花をえらみ心許りの御靈祭をする、雜誌記者の御訪問を受けて朝の一時間許りをお話する。風よき部屋に蟬の聲を聞きつゝ讀書、徒然の氣まぐれにといたづらに白玉をこしらへ氷に冷しておやつにいたゞく、常なら紅など白玉にさすべきをとつまらぬ事も又涙の種。入浴して他の御稽古ならねば夕刻よりこつそりと英語の稽古にゆく、今更に忙しとこぼせし其の日の戀しくも思はれて

日毎うつす笑まひも消えてけふ二十日鏡臺さぞやちりにくもらん

日暮れて學校の古き友達より電話かゝる、いつも芝居の打出し時の頃ははや夢のまよなか。

六

日記のつぎほ(二)　森律子

九月十三日(金曜)晴風　風はあれども雨にならぬは何よりの幸、四

五日前より市中はすべて黑くかざられて何となう淋しうおごそかなるは人の心も同じこと、けふは朝湯に身を淨め髮を洗ふ。この程より病院におはする父上の此頃やうやく輕快になられしも靑山式場へは御遠慮申上げて劇場前にて御一緒に拜する事となりし故お召物すべてをそろへて夜霧におほはれ遊ばされてもと袷物を持參する、通行止にならぬ內いそぎ樂屋入り、はや三階には眞白き御顏の澤山集まり居りしもさすがに今日のみは靜肅に見受けられ所在なさに給はりし御行列の順序書をいく度となく繰返すうち下の入口にはぞくぞく入場者の足音しげし、記念の爲とか勸めらるゝままにうかぬ乍ら北側玄關に集まつて撮影、又部屋に戻り長き時間をおとなしくやがて七時の鈴に一同正面玄關のそれぞれ定められたる場所へ整列して待うけ奉る、前に居ならぶ兵卒の今更規律正しきと時々見廻る上官

の下へのやさしき情の様を見てはこの程より何となう感じ易うなりし心とてうごかされぬ、奥ふかきかなしさの闇をやぶりて一聲の大砲、それこそ御出門のしらせ、そをきゝし時の心地何とたとへんに物なくたゞ粟だちてかたく威儀を正しき。松明を持ちたる人を先に御旗、武器、榊、御供の方々數限りなくさながら昔の繪卷物をひらきし如く動きて音なきは夢路をたどるごとし誠や夢にてあれかしと念じぬ。御轜車のひびきの追々に耳に迫りては何とて堪へらるべきハンケチをかみしめて聲立てじと自然にうなだれし頭をやう〳〵に上げし時ははや御車は過ぎさせ給ひし御うしろ影さへはるかなるにこのせつなすべては死しぬ聲たえぬひとり天地にわだち泣く音頭痛みはては胸さへ痛むやう覺ゆ、英國水兵の赤き服行き過ぎて間もなく列は絶えぬ。おからだにさわらぬ内にとまづ父上を病院へ

御返し申して自分は劇場にのこりこゝに夜中十二時のドンをきゝ遙拜をへて歸宅、あゝ御靈はいづこの空に、この夜をかぎり都を後に西下遊ばさるよと思へば思ひはこも〳〵何とてはいねらるべき目はいよ〳〵冴えて涙しきりに落つ。折から號外の聲、乃木大將夫妻の殉死の報、いたく胸を打ちぬ、おどろきと共に又このかなしみを去つて御供せられし君の御羨ましくも

君を思ふ民に代りてとこしへの御供の旅になみだする秋

なげき〳〵に疲れし腦はいたみて暗き氣にみちし此夜の早く明けよとばかり——(完)

七

律子の日記では內面的生活を窺ふ事は出來ないが概して帝劇の女優は朝のうちから夫々長唄だとか英語だとか踊だとか特別に御師匠

さんに通ふ、帝劇から歸れば歸つたで又修養をしなければならない、收入はといふとヤツと學校を卒業して舞臺に出るやうになつて幾らかの月給を貰ふ、美しい着物が着たくなる、他の俳優に比べて餘り汚い風裝もされないし交際の費用(他の芝居見物とか總見とか)も思つたよりかゝる、友達が華奢な自用車に羅の幌をかけて樂屋入をすると自分もやつて見たくなる、役割の煩悶から批評の事まで氣になる、思つたより苦勞の多いものだ、帝劇の山本支配人は曰く『地方から手紙が隨分參ります、一寸募集廣告を出すと二百通位は地方からくる、然し監督の都合上地方の方は絶對に拒絶して居ります、今度も女優補充の意味で募集しましたが市内だけで約百人其の十分の一位を採用しました、願書には無論父母の承諾書と戸籍謄本を添へさせる、劇場で何か嗜みのある者例へば長唄だとか踊だとか三味線だと

かを一寸やらせて見る、それから小學卒業程度で讀書をさせる、顔から聲から姿を見る、如何に美人でも舞臺で醜く見える性のがあるから一寸見の美人許りを採るのではありません、略及第した者は身許調べをやる、之は大に必要な事で品行などに非難があると困るから出來るだけ精密にやる、今度も或る良家の令嬢で兄弟には學士もあり本人も容貌から技藝から聲から實に理想的の女優候補者だと思ふ方があつたが品行調べで遺憾乍ら落第とした、中には殆んど病的の人があるから困る、そこで愈養成所に入ると二年間仕込まれる、開して義務年限が三年ある、養成所は一日多く三時間平均で女優として必要な技藝を習ふのである、卒業すると舞臺に出るやうになる、手當は定つてはゐないが數十圓を毎月貰へる、此金は女としてはよい方で樂屋入するにも銘仙の着物位を着て贅澤をしなければ樂に生

活がしてゆけるのである、夫から次第に上つて技藝の勝れた者になると今でも一月百數十圓になる女優がある女優熱の凄じい事は充分認められるが地方の志願者には到底滿足させる譯にはゆかない、東京市中に家があつて嚴重な監督者がなければ願書を受付けないのだから如何資格が充分であつても駄目である、採用した中には藝の方では殆ど下地のない人もあるが是等は養成すれば屹度よくなるといふ見込がついてゐるから採用したのです』

八

帝劇が女優に成功してからは眞砂座でも募集した、然し此は淺草あたりの源氏節などを寄集めたもので決して所謂新しい女優ではなく忽ち滅亡して了つた、次で有樂座が募集をした、今までは栗島狹衣の手に葛城文子などがゐた夫れに新手を加へて之を有樂座附とし

たもので可成纏まつた企てゞあつた、一方關西の方面から募集する に就ては藝の本場である名古屋を根據として久保田金僊が一切を擔當し東京は有樂座で募り始めた、何しろ女優といふ花やかな名に憧れてゐる女の多い事とて志望者は應接に遑ない程で試驗をする係の者も弱つた位であつた。處が中には帝劇と有樂座と兩方に願書を出し幸運を兩天秤にかけたが之は帝劇の方で德義上謝絕して了つた。名古屋の方も頗る應募者が多く締切つてからは栗島と支配人の新免とが出掛けて試驗の上採用したが人數は僅に三四名に過ぎなかつた、東京でも百何十人と云ふ志願者の中から十三四人を採用して東西併せて一團とし有樂座の練習所で稽古を始めた、地方からの者もあるので合宿所を定めてそこに收容し監督者がついてゐたが近頃は親戚だとか知己だとか身寄りの處に引取られた者もあるので今では

僅か一人しか殘つてゐない。新免支配人曰く『イヤ機運が向いたといふものか兎に角女優募集をやると驚く程志願者が集ります、北海道九州各地からくる手紙だけでも大變なものでコンナに女優が認められてゐるかと其豫想外なのに驚きます、十一日から女優劇を開演しますが之れは未だ練習所を卒業したといふではなし本當の芝居にはなつてゐません言はゞ試驗的のもので卒業する迄には數回やるやうになりませう、私の處も二年間養成されて三年の義務年限がついて居りますので卒業してから始めて月給といふのがつくのです、平常は試演でもやれば幾らか小使錢位の手當はやりますが大したものではありません、女の職業としては收入はよい方ですが二年間辛抱する間が却々に苦痛ですよ女の事ですから監督する方も心配で藝が出來ぬと言ては泣く、役がつかぬと言つてはブツ〳〵言ふ、全くや

り切れませんよ』と、有樂座の女優はまだ成功したといふ事を許せないが帝劇と異つて地方の女を幾らか採用したといふ事が特色である、凄じい女優熱、女の憧がれの的、ナント豫想外ではないか。

（大正一、九）

外人、夜の秘密

一

東京と横濱に住んでゐる歐米人の數といふは驚くべきものである。職業も色々であるが御役人だとか商人が其多數を占めて其他は敎師宣敎師或は觀光旁々の滯在、そんな少數の者である。是等の外人は如何なる生活をしてゐるか？といふ事を見るのも興味はあらうが彼等は如何なる方面に快樂を求めてゐるか？異鄕の夜をドウして遊んでゐるか？斯ういふ事を觀察するのは實に多大の興味を覺える事と思ふ、そこにはお互に道德といふ觀念も異つてゐるだらう、彼等が無暗に日本の商業道德を非難するやうに或は我等の目に映じた彼等の行爲が案外非難の多いものであるかも知れない、殊に我等の目に

異樣に映るのは外人の男でも女でも獨身者をよく見掛る事である、殊に夫婦にして而も別居してゐるのを見掛ける事である、獨身者がひとりでぶら〳〵やつてゐるのは何も不思議はないぢやないかと言はるれば夫れまでだがソコには色々の事情がある事で要するに外人には多くの？が認められる、殊に夜に於て？を更に多く認むるのである。享樂主義の歐米人は娛樂機關の極めて乏しい異邦でドウして快樂といふ事に於て滿足をしてゐるであらうか夫とも外人の總ては聖僧の如き生活を營んで居るであらうか？ト言ふ事に考へ及ぶと我等は愈々多くの？を認むるのである、だからドウしても此？を闡明しなければならない、先づ表面に於て外人は如何なる娛樂を爲しつゝあるかと言うと倶樂部で夕食後球突などをやる、然し之れは少數の紳士に限られてゐる、次に家族的の交際で相往復して歡談する、又

は偶音樂會などが催されるとソコにゆく、時には素人演劇がある、日曜には教會で聖き心の樂しみに耽る(だが今の洋人は十八世紀頃の此心靈上の樂しみに耽る程人間放れがしてゐるかドウか疑問だ)まあザット見た所で此位のものだが、サテ外人はお茶漬的な恁麼淡泊な娯樂許りで滿足してゐるであらうか實に疑はしいものである、暗い幕を若し切つて落したらドウだらう、夜の世界はたゞ安らかな淨い夜であらうか、見よ、箱根の夜景を、異樣なキモノやら聞馴れぬ歡笑の聲がする、ヨシハラの電燈燦きところに碧い目や赤い毛が見ゆる、築地の待合に不思議な繪卷物がひろげられる、西洋室で美しい花牌が操られてゐる、金貨がキラ〳〵光つてゐる、暗夜しのびやかに馬車の中に語るは誰だらう、日本のお月樣は粹人である、直ぐ雲にお隱れ遊ばす。

二

試みに築地の明石町邊の河岸に立つて見よ。夕方になると散歩する外國人が次第に多くなつてくる、夫婦仲よく腕を携へて語らひながら歩くのもあれば男がたゝたゝ一人できよと〳〵四邊を見ながら用があるでもなし無いでもなしといふ風に歩いてゐるのもある、夜の幕が全く垂れ罩むると此邊一帶は倫敦の色街ピカデリーを偲ばするやうな光景が現出される、洋人の靴音が闇に消ゆると眞白い女の顏が横丁から浮き出てすた〳〵と後を追てゆく、二言三言向うの方で言葉が交されたと思うと忽ち姿はどこへか消て了ふ。こんな女は麻布あたりから、遙々出かけてくる者で何れも外人相手の私娼である、みんな毎夜々々どこにか落ついてゐる、外人間に最も名高いのは築地本願寺前の待合丁の家である、數ある外人中で少し東京に馴れて

ゐるのを捉へてチョウノヤと言へば彼は直ちに『おゝチョウノヤのオミネサン』と破顔一笑して答へるであらう、オミネサンといふのは丁の家の娘で本年十九歳花の如き美人で巧みに英語を囀る、夫れも道理築地の△△女學校の卒業生で外國人は頭から呑んでかゝつてゐるので多數の外人はオミネサンの一顰一笑を拜すべくチョウノヤに押掛るのである、ところがオミネサンは却々の腕ッこきで風に柳と受流して巧妙にあしらつてゐる、實におみねさんは絶好の囮で而も案外堅い美人である。夕方になるとさる倶樂部にはドウして夜を遊ばうと云ふやうな連中が勢揃をする、日本の某伯爵なども其中に交つてサア丁の家に行かうと押寄せる、先づ彼等の習慣として音曲を聞く、ヴァイオリン藝妓、義太夫藝者などが新橋、新富町又は赤坂などから呼寄せられる、オミネさんが此間を頻りに斡旋する、義

太夫の意味は分らないが肉聲が耳に快く響くと見えて盛んに喝采される。興愈々熟してくると別間から色々な白い顔が現はれて來るのだ時に依つて女の種類は違うが不見轉藝者もあれば私娼もある、何れも時間定めで十二時近くなると外人等は夫々塒に歸る、妻を持つてゐる者は知らぬ顔をして口を拭いてゐる、開して接吻するやら樂しさうに話すやら頻りに妻の歡心を買ふ、これが一部の外人の誇りとしてゐる道德である。處が驚くべし此丁の家に遊びにくる外人の中には紳士として品行方正の人として德望高き人として而も高位高官に在る人として內外の交際社會から多大の尊敬を拂はれてゐる人も交つてゐるのである、兎に角丁の家は斯くの如くして名高くおみねさんは斯くの如くして外人間に光つてゐる。

三

築地の夜許りが彼等外人の歡樂を恣にする世界ぢやない。新橋停車場附近の人目繁きところにもある、夫れはどこかと言へば女中のよく交るので名高い、西洋料理店の名月軒である、名月軒は昔から美しい女中がゐるので評判だつた、近頃は交り盡して美人の名を許さるゝやうな女はゐないが人を喰つた女は澤山ゐる。こゝに來る御客の二三分は女中を狙つてくる外人に依つて占められ、其外人は東京横濱と相半してゐて多くは商人だが中には横濱から毎晩のやうに通つてくるのがあるから驚く、名月軒の女中の收入の多い事も評判だが從つて贅澤をする事も評判となつてゐる。藝者と違つて女中の役者買は餘り聞かないが名月軒の女中は役者狂ひをするとかいふ噂がある位で其金を散ずる事も想像が出來ると同時に金の收入のある事も想像される。こゝに來る外人は黃白をパッパと散ずる者が多い、

开して日本語も使へるし女中は單に『アイ、ラブ、ユー』だけ知つて居ればよいのである、御客の空いてゐる時には外人と散歩に出て銀座あたりの雜貨店で贅澤品を買つて貰う位の度胸は何れも持つてゐる。宜なるかな名月軒の名高い事や名月軒の女中であつて洋妾になつた者や外人の正妻になつてゐるものゝ多いといふ一事は如何に彼等の間に隱れた關係の深い根ざしがあるかゞ判らう。

或るホテルでは近頃ボーイが年頃の美人になつたので評判である が夫れは何も夜の秘密に關係はない、ホテルに來る外人は概して獨身者か左もなくば戀しき妻と別れて旅に出たひとり者が多い、『旅の恥は掻きずて』といふ言葉は日本人の公德心がない事を表明するものであるとして頻りにやかましく言はれるがホテルなどに來て宿る外人も亦盛んに旅の恥を掻き捨てゝゐる。ホテルでは何も知つた事

ではないが旅のつれ〴〵を仲介者が誘ふまゝに外に出かける、否誘はるゝと言ふより誘はしめて外に出かける、日本名物の吉原は無論の事として餘り人の知らない處に乘込むから驚くのである、ホテルと幾らも離れてゐない或る町の待合大高家は其本陣と知られてゐる日本風の座敷で遊ぶといふ事が彼等には珍らしからうが白粉をこてこてに塗つた藝者や淫賣婦がどんなにか嬉しいであらう、ウキスキーを飲み乍ら女とキャッ〳〵ふざける、歌を唄ふ、日本人の遊ぶのを見た日には殆んど見てゐられない程あぶらッこい遊び方をやつてゐる、茲に至ると外人の口癖な人道も糸瓜もあつたものぢやない。

四

或るホテルに泊つた外人が或る町の大高家で惡巫山戯をやる事は前のやうだが日本婦人の方から金に目が眩んでホテルなどにノコ

ノコ出かけるのがゐる。相當な風裝をして相當な身分があるやうに見せかけてゆく、ホテルでは知つた事ではないが曾てホテルに滯在してゐる外人の間に五十圓娘といふ渾名のあつた或婦人の如きは其一例である。又なかには潔白な婦人が作法を心得ぬ爲めに外人から非常な侮辱を受ける事がある。外國の例として夜更けて一人で男を訪問するやうな事は滅多にない。處が日本流に开麼事には頓着せずホテルに外人を訪問すると先方では化けて來た醜業婦だと誤解して奇怪な言葉を使つたり無禮な事をするものがある。此例は間々ある事で訪問者の方でも不注意な點があるが、又訪問される外人も餘りに助倍過ぎる。ソコで例のホテルの方はこれ位として日本名物ヨシハラの里に話は飛んでゆく。吉原は外國にまで名が轟いてゐるだけに觀光外人は無論の事在留外人も盛んに車を驅つてゆく。彼等は錦

繪を好むがやうに華魁の襠裲や赭熊がどんなにか碧い目に物珍らしく映る事であらう、而も色を賣る家が櫛比して賣女は花の如く居並んで厚化粧した顏を往來に晒して外人の群と見れば『異人さん〳〵』と格子先に寄集まつて歡迎する。彼等の好奇の目は輝き肉を喜ぶ心は躍つて『あゝ我が歡樂の鄕よ』と隨喜の涙を零さぬ計りに飛び込む、娼妓も彼等にはゲイシャの名を以て遇せられる、彼等は日本のゲイシャにお國振の色男を見よや、と計り應接間に通つて交渉が始まる。貸座敷の方でも外客雲集の難有さに感泣して近頃は何れの樓でも應接間は洋風で椅子と油繪の額位は懸けてゐる。彼等は定つただけの金は出すが、時間を劃る事は嚴重で何時間幾何といふ約束で遊ぶのである。吉原で第一流を以て自ら許してゐた大きな樓でも火災以來女に甘い外人を歡迎するに限ると家法を改めたか、表二階を

すべて洋風にして了つた、應接室から洋式の座敷それから寢室まで西洋式にして外客の便利を圖つた。斯うなつてくると所謂異人さん大喜びてヨシハラは依然名物として評判が高い。茲に笑止至極といふべきは或る外國の立派な御役所の歷々たる大官で一夜ヨシハラの里に樂しき夢を結び給ひしものか翌朝御役所で洋服の隱袋から何か探し出されると他の品物の中に吉原の或貸座敷の請取書が交つてゐたので狼狽てゝ隱されたといふ一つ話が今も猶外交官仲間に遺つてゐる。大官にして然り、他の外人の素行も推してしるべしである。

五

外人が東京での巫山戲方もひどいが東京は人目も多いし又家庭にも氣兼ねがあるので土曜から日曜へかけると田舍に出かける。鎌倉の風景がよいとか大磯の濤聲が忘れられぬとか箱根の湯は氣持がよ

いとか彼等は頗る巧妙な修辭を以て褒めるが箱根でも鎌倉でも左樣度々いつては興の薄いものである。殊に箱根となると彼等は目を光らし滿面喜悅福の神のビリケンのやうな顏をして出かける。箱根は開麼に佳いところか開麼に面白いところであらうかと熱狂のしかたが餘りひどいから一寸聞いて見ると成程箱根の山は天下の嶮で面白いところに違ひない、と言つて景色は面白くはない箱根には曰く言ひ難い面白味があるさうだ。唯湯に入りにゆく許りでは詰らないから外人の習慣として家族を引伴れて樂しく遊ぶだらうと想像されるが夫れは反對で女ならでは夜の明けぬ國に來たからにはドウしても家庭の女以外の女を要する、然し東京から女を伴れてゆくと目に立つし小田原から藝者を呼んでも目につく、ソコで此熱心なる需要を滿たすべく箱根では濃厚なる供給が疾からあるのだ。夫れは俗に洋妾

宿と言つて外人相手の秘密女郎屋がある、そこにゐる女はといふと恰も巴里の街の眞只中を友禪大模樣の日本服をゾロリと着流しボンネットを被つて巴里ッ子を艶殺？せしめてゐる新派歌人與謝野晶子女史の風裝も斯くやと許り思はるゝ裝ひをしてゐる。何れもけばけばしい裾模樣に而も振袖のキモノ髮は大廂で年の頃は二十五六から三十五六の年增、青ざめた顏に厚化粧、玉蟲色の口紅を注して安香水の香りプン〳〵厭味なゴム草履を穿いてゐる有樣は凄いなど言ふも愚か、こんな女が外人の聘に應じて宿に出掛ると酒の醉ひの廻るに伴れて大變な遊び方が始まる。其遊び方は一寸書き兼る、が斯る異樣な女がドウした風の吹廻しか新橋邊に現はれて銀座界隈を逍遙するから恐れるのである。中には外人と妾關係を結んだのもあるから御手當が滯つた時などには催促にやつて來る、市松大辨慶の振袖

か何かでシャナリ〳〵やられては迚も助からないが御本人は平氣なもので外人の店先などへやつてくる。中には脅迫がましい事をするのがゐる。

六

東京に家庭を造つてゐるものにして然り、箱根鎌倉と遊び歩いて色を漁るのに餘念がない、故郷には夫を思うて窓に倚つてゐる妻もあらう、其夫は遊ぶことゝ打つ事と飲む事の外には餘念はないのだ。箱根の洋妾宿は需要供給の關係から出來たものに違ひないが市内に一ッ奇怪不思議な殿堂が彼等の爲めに築き上げられた事がある。此遊び方や此道樂は日本人の夢想だに爲し得ぬところで實に彼等に依つて輸入された俗惡醜態を極むる遊びである。諸君は屢々話に聞いて眉を顰められた事と思ふが伊太利のネープル、英國の倫敦、佛國

の巴里其他で『秘密の遊び』といふ不思議な遊び方がある、手段も種々であつて實に筆にするだに汚はしいが例へて言ふと一人の田舍者が一人の美人に騙されて或家に誘はれるとする、美女は頻りに酒を勸め甘い蜜のやうな言葉を浴びせかける、知らず〳〵の間に田舍者は血を湧き立たせて女にしなだれかゝる、女は甘言を以て猶も惑はし密室で鬼ごつこか何かをやる、此奇怪な光景が光線の作用に依つて隣室の鏡にあり〳〵と映るや滿堂の紳士は盃を擧げて歡呼し床を踏鳴らし口笛を吹いて喜ぶといふ誠に何とも申上げやうのない面白い遊び方、これは其うちの最も平凡なる例であるが彼等は此遊びを日本の而も東京に於て行はうとしたのだ、否夫らしい遊びをやつたのである、場所は黃塵の巷を遠く離れた隅田川の滸り、都鳥のまどかなる夢を破る物音は向島の一樓より起つた、今は廢れてないが

其昔時めいた花月華壇の一室が即ち此遊び場所であつた、踊る女も女であるが見て喜ぶ外人も外人である、雨しよぼですら日本人は眉を顰めるが此歌麿の錦繪にでも見るやうな踊を見たらドウだらう嘔吐三斗はやさしい所だ、あゝ黄金の權威を以て蠻王ですら爲し得なかつた外人が逸樂の夢のあとよ、春風秋雨幾年を過ぎて歡樂の夢のあとは秋草が吹きこぼれて小雨に濡れてしよんぼりとしてゐる、あ

あ其夢のあとよ。

七

帝都に數ある大使館公使館の夜は淋しく暮れる、此等の建物は多く山の手に在るから、四邊はさなだに秋闌けて哀れ深き今日此頃一段の寂寞を覺えるが、其館に入れば到る處電燈眩く今しも公務を了へた外交官連は思ひ〳〵其館宅に歸りスキート、ホームの樂しき團

欒を夜毎〳〵に繰返すのである國を去つて千萬里江山遠く隔てゝ花の晨月の夕望郷の念はいやますのが常ではあらうが、大公使館裏の夜毎の歡會は他郷ならでは却つて味はひ得られぬ境涯であると某大官は物語つた。

大使館公使館構内には大公使以下數名の外交官の官宅があるとしたものだ、外人の習ひとして夕食は一日中一番御馳走のある時で、七時を例刻とし、甲は乙に、乙は丙に、各自毎夕のやう相寄相招かれて一席の會食を催すのが例になつて居る、毎夜の事であるから毎時大牢の美味は並べぬまでも美酒佳肴卓上に堆く主客相興じて飽くまで歡を享けて語らう光景は日本の兎角七六ケしい主人の周圍に陰氣な家族の居流れて遠慮勝ちに食事を濟すのに比べて見れば此點は實にも羨ましう日本の家庭にも輸入したいと思ふ位だ、歐米の婦人

は内を外の交際家が多いが、斯うした夜毎の晩餐に主客の間を斡旋し花やかに賑しう家庭の女王として働く習慣だけは確に外人家庭の美點であらう。

時としては外交官一夕の食堂に列國の大公使がゾロリと顔を並べる事もある、年若い夫人の身の上としては千金の美服を人に見せる機會も少い他郷の事であるから、斯かる會合には綺羅美やかに着飾つて出かける、門口に綠門を仕つらへ馬車自動車數臺物々しう詰めかけるから何事の出來かと怪しまれるが是れ彼等が僅に他郷在住の寂しさを慰める爲の晩餐會とは知らるゝのだ、一席の晩餐會とはいひ乍ら歡興湧くばかり且舞ひ且謠ひ、聽ては美酒川と流れて夜の更くるを知らぬ事交際期には毎度の事である。

かほど大袈裟の晩餐會ならずとも相知り相親しきものゝ間には兩

三相會して毎夜のやう顔を眞赤にして罪なき歌留多遊戯に耽りつゝ談笑に夜を明かすのが常である、品の高いとはあるが、外人はまこと享樂の民、斯くして一日又一日、其身他郷の客たるを忘れて面白可笑しう働いて遊んで暮らすのである、亞弗利加の沙漠の眞中に立派な都會が打建てられるのも此理窟からであらう。

八

大公使館員を初め之に准ずる一二流紳士が夜毎の歡會の他の一幕は倶樂部生活である、勿論此處には何れも秘密はない、正々堂たる交際場である、然るべき紳士といふ名の付く紳士は夕暮になるとニコ〳〵と三々伍々集ひ寄つてはニコ〳〵と遊び興じてニコ〳〵とホームに歸つて行く、紅顔子も白頭翁も些の差別なく一日の骨休みは此倶樂部であらう。

倶樂部の酒場はなか〳〵賑はう、双の頰を眞赤に熱らして五色の息を吐きつゝ玉突場に突進しては盛んに球戯の勝負を試みる、ゲームに夢中になつて幾組かのチャムピオン連の秘技を弄する所は無邪氣にも亦元氣よく成程遊び好きの外人には無くてはならぬ機關であると首肯される。

倶樂部の他の一室には、相識の面々卓を圍んで談笑湧くが常である、固より理窟ばつた話題はなく輕口の諧謔など連發されて臍の底から出るやうな笑聲往々窓外に洩れる、歐米人は談笑好きの民族である、用事にかまける時の外は必ず談笑して居らねば承知せぬ、だから陽氣にも見ゆるのだ。

倶樂部は必ずしも夕食の場ではない、多くは前回に紹介したやうな家庭團欒の樂みに憧憬れて居る連中であるから、倶樂部で物の二

時間、一盞のウキスキーに興を煽りつゝ且つ談笑し且つ球戯を試みて一汗かいた揚句は一目散にホームを指す、實にや煩勞に疲るゝ外人等の一日は樂しく暮れて、さて毎夜夜の深くなるまで思ひ〳〵の快樂に耽るのが彼等が理想的の生活法といふものであらう、をりを見て秘密の夜の更け勝ちな人があるも、それは之の走損ひ事々しく咎め立てするにも當るまいと言ふ人は言ふ。

倶樂部だけで遊び足らぬ連中は唯一の戸外遊戯たるテニスに出かける、麹町の永田町にテニス倶樂部といふのが出來て居る、此處には内外人打交つて球戯を演つて居るが、歐米人は八九分を占めて居る、老年者に青年者それに妙齡の少女も一緒になつて輸贏を爭ひ、汗みづくになつて興がつて居る光景は外人に於て初めて見る所、歐米人が何時までも若いとは此事をいふのだ、此處で一汗拭いては多

くは倶樂部に引上げる、歐米人は善く遊ぶ民族ではある。

九

外人の夫婦交際の甚だ密なるが如くで其實頗る疎なるものゝ多きは日本人の目には殊の外異樣に見える、歐米人が益生活問題の爲に脅かさるゝ反響ではあるが、晩婚者獨身者の年一年に增加して從つて孤獨各々相憐むものゝ燭を秉て遊ぶ慣習の彼等の間に發達し行くも自然であらう、マコーレー、アーヴキングは孤獨であつた、米國大使ブライアン氏も孤獨生活を營んで居る、其理由は與り聞かぬが此等大家が妻帶せぬ事情は定めて高い理想に根ざして居るであらうが一般狂留外人の中で初老にして尙ほ未婚で居り、若しくは結婚後兩々遠く離れて孤獨の生活を送るものゝ少からぬのは日本人には合點の行かぬ所で、斯かる人物が多いのは種々の理由があるとしても、

歐米女性の虛榮心が途方もなく發達して其要求の多端なるが爲め、夫婦生活に對して一種恐怖の念を催し居るか、或は結婚後全く手を燒いて孤獨生活の餘儀なくせられて居るかは掩はれぬ事實であらう、これは生活問題の一種であるが女性が男泣かせの結果であるとの評は免れぬ。

然るべき高官に在るものゝ夫人倫敦の月を眺めつゝ氣樂至極の生活を送るかと思へば、巴里に居る妻女を養ふ爲にはるゝ東京三界に身を窶して錙銖を爭ひ居るものなど少からぬは奇觀である東京に男やもめの多いのは此理窟である、雲濤萬里を隔てゝ旅情慰むるに由もなく、さなきだに遊び好きの外人等テニスに、觀劇に、倶樂部生活に、折々浮いた話柄を貽すものゝあるのも强ち無理と言ふでもない。

男泣かせの例は少くない、負債を忍んでも夫人が馬車欲しさの要求を容れて居るものもある、身は簿書堆裏に汗を拭ひながら愛する妻を日光くんだりへ避暑遊山に遣つて居るものが澤山ある、主人は朝暮の劇務に疲れ切つて居るのを後に見て京都奈良に花よ月よと浮れて居る奥様もある、夫たるものゝ妻に對する同情であらうかも知れぬが、これでは事實上の孤獨生活だ、然らば何うして其無聊を慰めやうか、燭を秉つて夜遊ぶ習慣は自ら發達する譯だ、女性の男泣かせ、女性故の犧牲的生活、半面の消息はこれで讀めるだらう。

十

上來記せる所は當つたとか當らぬとかいふ批評はある、しかし明るい方面と暗い方面とから見た外人生活の一斑が幾分か窺はれたかと思ふ、勿論一斑である全豹は説明の限りではないが、常識の在る

人でさへあるならば二斑も三斑も分る譯である。

序ながら日本殊に横濱東京にはタイピスト其他の婦人從業者が澤山居る、彼等は百圓二百圓の婦人としては高い俸給を受くるの例である、言ふまでもなく獨身者が多い、其獨身生活といふのは、生活戰爭の餘波を受け已むなく他鄉にまで流れ來て、婦人從業者の心憂き朝な夕なの生業に、いそしんで居るのであつて、其多數はお嫁入支度である、名ある紳士の夫人でタイピスト出身者は隨分ある、職業神聖主義の外人は一向恥しい事とは思つて居らぬ、但し纖弱い婦人の働いた收入といふのは知れたもので、限りない青春の慾望を滿足さする譯には行かぬ、妙齡な未婚婦人のさなきだに虛榮に憧憬れ、誘惑に掛り易いは當然で、折り〳〵思ひがけぬ婦人に大それた風説の立ち勝ちなのは珍らしくなく無理とも言へぬ。

曾て歐洲の一新聞に左の樣な記事が掲載された事がある。それは一婦人の祕密と題して或る女が內々で公娼の免狀を得て布哇、支那と渡り歩き心ならずも春を鬻いだ結果、有福な一婦人となり濟まして綺羅星と着飾り鄕里に歸つて、東洋で女敎員を務めて來たと吹聽しつゝ婿選みに餘念がない趣を說明してあつた、其鄕里といふはセイヌ河畔の一都會であつた。

斯る目的で日本に來て獨身で働いて稼いで貯蓄して居るものがあらうとは信せぬ、が無いといふ反證はない、兩性間の德義問題は歐米人間最も八釜しい事にはなつてゐるが、獨身の靑春婦人が久しく異鄕の月を寂しみ、孤懷行るに由なきものゝ前記一婦人と同じやうな誘惑に囚はるゝものゝあるは免れぬ事であらう、外人等往々無聊を慰むる爲め素人劇を公開の劇場で演ずるが、小夜更けて年若い男

女の入り亂れて脂紛の氣に醉ひ興のまに〳〵劇中の人と化する時、秘密の幕は深く垂れて何事をも窺はれぬが秘密の幕の蔭なる良家の子女を聯想しては今更ながら外人が婦人解放の大膽なるに驚かざるを得ないのだ。

漂泊せる美人

（上）旅役者の妻

私は今年になつて四度家を移した。芝愛宕町二丁目十四番地にゐる頃『文章世界』に二丁目一番地と誤植して住所錄に出された。郵便物がいつも迷つてゐたが、妙なもので夫れから二三ヶ月經つて引越した家が偶然にも二丁目一番地であつた、だから郵便は近頃迷はずにくる。

隨分妙な郵便がくる、株式仲買の廣告郵便位ならまだしも、芝居の總見勸誘やら、原稿のたゞとりのづるい葉書やら、中には結婚媒介所の廣告まで飛び込んでくるから恐れる。——ところが或る日珍らしい手紙がきた。近頃飼ひ初めた小鳥、相思鳥や瑠璃鳥や朝鮮駒

鳥と云つたやうな、小鳥の趣味としては極めて低い初心な處の鳥許りだが、それでも私は一生懸命になつて水を浴びせたり餌を磨つたりしてゐる處へ符箋のついた手紙が舞ひ込んだ。

一、役者の手紙

その手紙は骨張つた字で書いてあつた。發信地は朝鮮の仁川で、例の俳優孤影からの便りであつた。

誠にお久しうございます。貴方と私とには最も思ひ出の深い仁川へ私は八年振に又參りました。舊知の皆樣の御發展はたいしたものでございますが、私は相變らず國劇旗下の一兵卒で自ら省みて誠に忸怩たるの外はございません。

仁川もあの頃とはまるで見違へる位さびれました、とてもあの頃の仁川は思ひ出せぬ位の淋しさです。それに最も親しうお願ひしました貴方のゐらつしやらないとは何だかやる瀨のない淋しさを感じます。貴方はいよ〳〵お盛んでございませう、昨年の一月東北から名古屋へ參ります途中、最初お訪ねしたく存じました

が年末の急ぎの旅でございましたから殘り惜しいことに其儘を打過ぎました。私もあの後色々の波瀾のある生を營んで參りました。秋田に居ります頃そんな事を手紙の端に書て申上げましたが、私は以前朝鮮でお別れ申しまして、臺灣から内地までは北村さんと一緒でございましたが、其の後此商賣が厭になりまして鄕里に歸りました。ソレあの貴方が堺の例の家にお訪ね下さいましたあの頃の事でございます。兄は丁度十數萬の負債にどうにも整理のつかない時で、私もそこに飛込んだのですが大童になつて隨分奮鬪もしてみました。ですが、とう〳〵祖先の家を維持する事が出來ないで只今は一寸逼塞の形でございます、お出で下さいましたあの家も只今はございません。其後自分に一座を作つても見ましたが堅實な計畫を致しませんかつたものですから、見事に失敗しました。其頃からもう何だか世の中が厭になりまして、生きてゐるのがいよいよ望みが少くなるやうな心地になりましたものですから、或る女と大森の海に情死をはかりましたが、不思議な事に船頭に助けられまして命拾ひを致しました。それから間もなくの事なんです、單身飄然と奥州を志しましたのは。ところがそこでも亦芝居にあるやうな奇遇が出來ました、それは私が厭でたまらなくて、五年前に捨てました女が、私の

の子を產みまして、その頃まで消息を知らずに居りましたのが私を訪ねて參つた事なのです、私は知らない間に四歲の子の父となつてゐたのでした。

やむを得ないので夫れを連れて再び四年ぶりに北村一座へ歸りました。其後も一度捨てましたがドウした深い惡緣か又歸らなければならぬ事情で只今も一緒に居ります。女房子をつれた旅役者、樂書の一ぱいしてある部屋に寢轉んで、多奇なる半生を顧みますると、誠に感慨無量なものがございます。もう私も花やかな過去の幻影は皆消えて了ひまして愈々幻滅の悲哀に心を削られて許り居ります。鏡に映る自分の顏を白粉で彩り乍らも皮膚が乾いて皺の多くなつたのに一入哀しみの涙が湧き、ます。

思はずもお懷しさにいろんな自分の耻ばかり申上げました、どうか笑つて下さい。こゝまで書きますと何だか氣分が感傷的になつて參りまして、何とも云ひ知れぬ悲しい思ひが胸にこみあげて參りました。今は夜の一時半、曾て八年前に一度は貴方とお話を致しました部屋で此手紙を書きました。

孤影生

二、能代港の奇遇

餌の入つた鉢を置いて此手紙を讀んだ。そうかなアもう八年にな

るかなア、と思つた。さうすると私が十九歳の頃で彼はもう三十歳位だつたらう。堺の或る舊家の次男、それが俳優兼作者、私は朝鮮の一小新聞記者。坪内博士の『ロミオとヂユリエツト』は此頃ふたりで讀んだかに覺えてゐる。寒い晩ふたりはよく温室で語つたものだ。あれから八年にもなるかなア、としみ〳〵彼の事が思ひ出された。彼とは仁川で別れてから後、門司の稻荷座と博多の壽座であつたかに覺えてゐる。其後私は東京にきてから社の用事で大阪までいつた。夏の事で、彼からも便りがあつてゐたから堺のSといふ家を訪ねて行くと夫れは藝者屋であつた、その頃私は藝者のなまめかしい話聲を聞てすら慄へたものだが此家の暖簾を潜るには幾度か躊躇した。此手紙に堺の『ソレあの』と思ひ出したやうに書てあるのが此時の事である。それッきり私は彼に會はない。——

話は飛んで大正元年の事である。元年と云つてもまだ明治天皇の御惱が發表されぬ前の確か六月の事、私は秋田縣下を巡回した。私が秋田に深い馴染をもつたのは確か明治四十二年の東京新聞雜誌記者團が、この縣下を巡遊した時からで、其後一度ぶらりと私ひとりで遊びにいつた事がある。その次の三度目の旅行は、「大阪毎日」と「東京日日」が久しい前から實行してゐる通俗教育普及といふ目的の「通俗講演會」と「通俗教育活動寫眞會」の用向であつた。「大阪毎日」と「日日」とは「大毎」の巡回病院や兩社の共同事業である日本沿海の海流調査や飛行練習生や海外留學生の養成や、聞いたゞけでは更に派手ではなく、新聞社の計畫としては寧ろ地味過ぎる程の事を熱心に而も連續してやつてゐる。然し其效果は一時的の賑やかしの樂隊つきの偏ふしなるものと同日に論ずべきでない。左樣な計畫の一つとして講演會と活動寫眞會を數年來一日も休まずにやつてゐる、學校や劇場、寺などの會場のない處は天幕をかけてまでやつてゐる。其用向で私は一ケ月程秋田縣下を隅から隅まで巡つた。講演など大それた事はやれないが、通俗的な平易な話くらゐなら出來やうといふので、毎日毎夜しやべつた。院内を振出しに湯澤から横手、寄り道になるこまゝした處まで入つて、遠く能代から小坂

歸りには土崎、秋田といふ順序で隨分よく細かく歩いた。この旅行の途中で意外な出來事があつた、トいふのは孤影の手紙にもある北村生駒一行と能代でバッタリ會つたのである。

三、大森海岸の心中

私が能代の町につくと辻に下つてゐるビラが不圖目についた。『國劇北村生駒』といふ大きな字はいかに私を驚かした事だらう、朝鮮や九州であつた人と此秋田の地で會はうとは全く夢にも思はなかつた。

その日の夕方北村と芝居小屋の近くの宿で會つた。私も二十貫からの體量になつてゐたし北村は依然として妻君と共に二十貫以上に肥つてゐた。合せて六七十貫の三人が鼎座して妻君の『まアまア』といふ感投辭を雨のふるやうに聞き乍ら昨を談じ今を語つた。

『この子、怜悧だつせ、それは〳〵』と妻君は養つた子役を見せた。それに不思議な事は二十年來子がなかつたのに、こいつちにきて出來ましたと布袋さんのやうな妻君は狸のやうな腹をしてゐた。臺灣と北海道ではだいぶん儲けたらしかつた、もういゝ加減に旅役者生活も打切にして、博多の千代の松原で旅館でも初めやうと思ひますなどゝ、暢氣さうな話をしてゐた。

一座の俳優の半ばは皆私の顔を覺えてゐた、代る代る私の處へ來て話をした。だが私は物足らなかつた、何だか物足らなかつた。孤影の顔の見えないのが物足らなかつた。

『孤影はんなア、あの人の事、あんた、お知んなはらんか』と妻君が云つた。私は知らないから知らないと云つた。

『さうですか、だが東京の新聞に出てゐましたよ。あなたの處の新

聞にも出てゐたぢやありませんか』と北村も云ふ。

『僕の處のに出てゐて僕が知らない筈はない、廣告の文句から相場欄まで讀んでゐるから知つてる。併し孤影の事は兎に角知らないよ』全くドウ思ひ出しても孤影の事は新聞に出てなかつたやうに思ふ。

『ア、さうや〳〵本名で出てゐたさけに、知んなさらんのも尤もや』と妻君は上方辯や地方訛のごつちやな辯で斯う云つた。

北村の語る處に依ると大阪から孤影と若い藝者とは東海道を上つてきて、方々遊び歩いた末、心中といふ美くしい幕になつて大森の海岸から飛込んだ、處が水が淺かつた爲めにドウしても沈まない、ふたりで焦つてゐる處を羽田の漁師に助けられて品川署へ云々といふ記事であつた。

『ア、それか、それなら見たとも、而も僕が其通信の原稿に筆を入

れたやうに覺えてゐる、ア、それか』と僕は息をはづませて云つた。

『今はどうしてゐますかね、何でも東北の方へ入込んでゐるらしいですが……、其相手の女は抱主の方へ引戻されましたから今は孤影ひとりですよ』――この北村の話があの手紙の『單身瓢然として奥州を志し』た處に當るのである。

能代での孤影の話はこれだけである。あとは私の心で彼の數奇を極めた生涯を思ふのみで、形に現はれた話はこれだけである。此夜から『日日』の講演會は俄かに會場を變更して小學校を斷はり米代座に改めた。一つは北村が私に對する好意で劇場を提供してくれたのと、一つは北村が私共の一行と同夜に開場しても人氣の立つてゐる私共の爲めに觀客を呼ぶ事が出來ないと思つたからである。

四　車から見た女

話は更にいつそく飛びに飛んで行く。

秋田の旅行を濟して東京へ歸ると、明治天皇御惱。――永い間は不眠不休の活動。目の廻る程の忙しさ、宮内省で藪蚊に喰はれ乍ら夜を明す、宮城内の御濠の蓮が美くしう開いてゐる朝、宮内省の玄關先で秋田からの孤影の便りを讀んだ。能代の奇遇は北村から聞いた。自分は知らぬ間に人の父となつてゐた、と永々と運命論が繰返されてゐた、

大正元年の年暮、彼は名古屋へ飛んだ。これが手紙の中の「年末の急ぎの旅でございますから」彼は名古屋で正月興行をしようといふ北村一座へ彼の女と彼の子とを伴れて走せ加はつたのである。

翌年の二月、私は京都、大阪、奈良と極めて暢氣な旅をした。私の社では「見學」と稱して「大毎」の記者は東京へ「日日」の記者は關西地方へ「見學」にやつてくれる規定がある。私は京大阪はゆつくり見物したことがない、奈良はまるで知らないので二週間許り暇を貰つて遊んだ、「見學」とも「出張」ともつかぬ旅であつた。

その途中、名古屋支局に寄つた序に北村の家を訪ねると、まだ寢てゐた。みん

な吃驚したやうな顏をして私を迎へてくれた。私は孤影はドウしたと聞くと、

「昨夜逃げました、ドロンをきめて了ひました」と北村は困つたやうな顏をした。

私の「新聞記者の手帳」の第一集に次のやうな一節がある。

――美人の床山を伴れて第二の故郷のやうに馴染の多い名古屋にきた、彼を知つてゐる名古屋の藝者は彼をして家庭の主人たらしめない、誘惑の手は次第に迫つてくる。彼は一夜その美くしき女と子を打ち捨てゝ逃げて了つた、今では北陸の田舍を流れ歩いてゐるとやら――名古屋から京都に出るまでには菜の花が一ぱい咲いてゐる、彼は此菜畑の間をどんな見得を切つて逃げたのやら。――

私のあたまには此筋書が色々の形に生きてくる。――

北村と妻君とは、秋田で生れたといふ健やかさうな子を私に見せて、いろ〳〵秋田の話やら孤影の女の話を聞かせてくれた。その女は秋田市の生れで此一座の床山として伴れて歩いてゐた、その間に孤影と出來たのであつた。

「そりや、ゑゝをなごだすせ、秋田式の顏だちでな、そりやゑゝをなごだつせ」と妻君は繰返していつた。

それにしても孤影に捨てられた女と子とはどうして口すぎをするだらうといふ

心配もあつた。北村は私の爲めに姓名判斷をし乍ら斯う云つた

「しようがありませんよ、どうにかなりませう。困つたら又歸つてくるでせうかられ、……その女もマアそれを待たせるだけですが、旅役者といふものは斯うしたものですよ。もう其女もくろ頃ですよ、全くいゝ女ですよ。」

私はそれを待つてゐられなかつた。汽車の時間が迫つてゐた。急いで車を命じて貰つてこゝを出た。十四五間も來たかと思ふ頃、急ぎ足でくる女をちらと見た。これだッ！孤影の女は！と、ほんの行きずりの一瞬ではあつたが、私の眼にはまざ〳〵と其女の美貌は刻まれた。私は秋田の女の輪廓をよく知つてゐる、たいてい途中であつても秋田產の女は外れッこはないと思つてゐる、違はない、此女だッと車の上で膝をたゝいた。

秋田の女の如く美くしい顏をしてゐて、而も打算的な女はゐない。名古屋女は算盤を撥いて戀をする事に於て有名だが、その名古屋に秋田の女が生きてゐる事を面白くも思ひ、また餘りに劇的である此女の身の上を憐れにも思うた。

――この間一年經ち申し候――

そして手紙がきた。仁川から長い〳〵こんな手紙がきた。彼は北村が云つた如く、困つて歸つてきたのかドウか知らないが、又この女と子と一緒になつて旅から旅へと渡つてゐる。――あゝ何日、彼とめぐり合つて滑らかな口つきで語る彼の話を聞く事やら。――私は彼に何とか云つて返事をやらなければなるまいと今思つてゐる。

(下)「白鷺」の女

武藏野の名殘は郊外に出なければ見られない。三菱ケ原も中央停車場の開通と同時に大東京の中心となつて了うし、洲崎を一寸それた處にいつても葭草はない、武藏野らしい土の臭ひも一株の草も大東京のうちでは見られなくなつた。

江戸女の面影はどこにあるか、新橋は名古屋女に征服され、葭町、柳橋も等しくオキャアセ種に蠶食されて、純粋の江戸女の住むべき地や絶るべき草は、次第に恐ろしい時世の力に食まれつゝある。寂びた江戸の錦繪は光澤ある三色版に驅逐され千社札は石版で刷られやうとしてゐる。

昔は知らない、新橋のぽんたが全盛時代は云はずもがな、おゑんの目も今は見るによしなく、初代老松の名も今はオキャーセ種に蹂躙され、あゝ北洲が賣物の今日、ダイヤは見てのお歸り、ダイヤを見世物の今日會話術を心得ぬ今日、生き物の藝者が人形の藝者になつた今日、藝者屋に金庫の並ぶ今日。

或る魚河岸の舊家が滅びんとするのを惜しんで、進んで五萬圓の借金をし齡老けたる今日まで猶借財に苦しめられ乍らも、權現樣以

來連綿として續いた看板を女の力一つで盛り返させたといふを誇りの喜代次。さては或る大家の若樣が誤つて牢獄の人となり、娑婆へ出ても身寄は家名を楯に監視を受くべき家を貸してくれないので、水商賣のこれが人氣に障つてもソコが女の意地と、自分の家に迎へて長火鉢の向ふに据らせ、ハイこゝで立派に監視は受けますと警八風を吹飛した壽滿子。これ等はちよつぴり都會に喰ひ餘された江戸藝者の名殘で、云はゞ一枚二枚とちらばら賣らるゝ錦繪の類のみ。他は滔々としてオキャーセに就き贅六東漸、江戸西漸、今ぢや哥澤は大阪で流行ります。

下谷のおしゆんも老ひたり。曾ては伯爵の猛さんと深編笠に赤櫟のお約束、サ、ホーカイの門付、時の宮内大臣土方伯の玄關先で法界屋の眞似をやつての惡戯土方久元、こゝな不屆者と鎗を捻つて追

拂ひにくる、逃る、また來てサ、法界――お小使を貰ふまでは所謂伯父さんを弄つてゐた茶氣もあゝ今は失せたであらう。身あがりするといふ事を火の見にあがる位に心得てゐる今日だ。桂公が亡くなればお鯉は五萬圓の爲めに髪を剪る今日だ。それを蔭からつッつく所謂江戸ッ子なるものゝゐる今日だ。

あゝ江戸の女は何處へ行つて終つたか。もう滅び盡して了つたか、黒襟や素足はあつても江戸の臭ひはせぬ、あゝ江戸の女はどこへいつた。――私は更にそれを知らない、たゞ私は茲に泉鏡花氏が書いた『白鷺』の女を知つてゐる。

一　思ひがけぬ手紙

見ず知らずの人からよく手紙を貰ふことがある。私は興深く思ふ。つい十月の十四五日頃であつた、一通の手紙を受取つた、封筒は無

名だつたが、中には身分も姓名も明かにしてあつた。

突然ですけれど旅の宿から此便りを差上げます。實は今朝食後に中央公論であなたの「戀の照葉」を讀んでひどく感じたのと、私にもあなたの力をかりたい一人があるので、今日の仕事の競馬會には二三時間の餘裕がございますので、手取り早くかきます。あなたは泉さんの「白鷺」を記憶して御いでゞすか、そして時雨さんに紹介されたことのある其女主人公を御記憶ですか、その人が今どんなにして死の床についてゐるかを御存じですか。

悲慘などゝは言ひたくはありません、然し其人の不幸つゞきは「白鷺」のあとを惹て今につゞいてゐます。（中略）そこにあなたの「戀の照葉」を見たのです、私の及びがたい力よりもとあなたに手紙をあげて切めて滅ぶる江戸に涙がございましたら御筆をお借りする事が出來やうかとも存じましたので。――「白鷺」の小篠のなれの姿は今銀座の四つ角に病みほうけてゐます、何れ散る身なら切めてその藝術だけでも遺さうとしてか、妹の――「白鷺」ではとしちやんになつてゐる櫻ン實の好きな――子に稽古をつける爲め淋しい聲音を張つて居ります。――（下略）

此手紙を讀むと私の興味はすつかり小篠の身の上に吸ひつけられ

て了つた。直ぐ返事を出すと福島にゐる此手紙の主――Sといふ人から原稿紙二十枚位にこま〳〵と小篠一家のことを書つけて來た。『白鷺』は本になつても讀んだし、喜多村の芝居でも見たがモ一度讀返さうと思つて、古ぼけた本を取出した。――讀者の爲めにも極めて簡單に、この小説の筋だけを並べて置く必要があらう。

二、小説の筋書

文章は鏡花氏一流の妖艶な筆で書かれてある。小篠といふのが主人公、濱町の或る料理屋の娘だつたのが次第に零落して新橋代地に一家退轉、父の歿後、母は髪を切つて河岸の買出しから何から一人でやつて、今ぢや仕出し屋、小篠は待合などへ奉公した後新橋から藝者に出る。――五坂といふ狠やら、ぶく〳〵肥つてゐる於登利といふ待合の女將やらが壓迫を加へる、小篠には亡くなつた伊達先生と

いふ心に思ふ人がある、在世の時ついぞ思ひのたけを打明けた事もないが、今ぢや先生の影が心にさして、知らぬ人の爲めに千々に思ひを碎いてゐる。――その先生の弟子の稻木順一と先生の三回忌の頃から知つて、順一に會ふのが先生を拜むやうな氣がして、ふたりの間にいろ〳〵美くしい幕がつながれる。江戸の女のいきもはりも隨所に現はれる。小篠の妹の年ちやんといふのがある、櫻ンぼうの好きな子である、その頃、小篠の家は年ちやんに櫻ンぼうを買つてやるのに困る位、勝手向が惡かつた。それに小篠は隨分人の爲めにべタ〳〵捺してやつた印があつた、其印の口にも苛められてゐた。

とう〳〵小篠は狠の五坂の爲めに、大勢に圍まれてむりむたいに責めぬかれたが、死んだ――五坂が大悦喜て歸つた後――懷中の爪こすり、小刀など七つ道具の小さな萬能鋏の尖の鋭いので咽喉を

掻き切つて死んだ。懐中かゞみの中へ、五十錢銀貨を鼻紙に包んで『年ちやん、さくらんぼを買つておあがんなさい』と書いてあつた。

以上、ほんの摘むだ筋だけであるが、順一とお篠との間に江戸ッ子が目を細うして嬉しがるやうな文句やいきはりの筋があるが、それは實話のなかへ入れる。

それとモ一つ讀んで置かねばならぬのは長谷川時雨氏の『明治美人傳』中の『白鷺の小篠』である。――白鷺の小篠とは作者鏡花氏が其作物の面影を彷彿させようとして考へてつけた名ではない、其作の命のお富さんを現はすためのお富さんに代へた假名である、それが、まあ實によく其女の姿と氣質とを言盡した名となつた。――浮世の苦勞にやゝ薄くなつた生際、目千兩の張のある目つき、眉は此人としては優し過る程のんびりと長く、地味好みの江戸前仕立、

低い藝者島田に水のたれるやうな笄一本、とは云へ御酒をのんでたんかをきる時の氣負さ、藝者としては賣れなかつた、此お富さんに小篠の名をつけた人の爲めに、小篠は一入瘠せた程の苦勞もしたのである。――こんな意味の文句もあつた。

三、小篠の家

小篠は生きてゐる、小説では自殺してゐるが生きてゐる、生きてはゐるが、苦しみあがき乍ら生きてゐる。

これから福島のS氏の手記をくる。

一、小篠の家は銀座尾張町新地十七番地にあります。尾張町の角、八十四銀行から數寄屋橋の方に名を忘れましたが隣りに印判屋があつて、その次が國光生命といふ順へそして裏通り新道がある、その印判屋と國光生命との間の露路を入るか、新道の支那料理の隣りの貸本屋と稲荷さんのある間を入るかすると、直ぐ文明軒といふさゝやかな西洋料理がある、其前の家の東側に陶器の表札に「杉本」

と書いてあるのが小篠の家。先頃少しく修繕を加へた――それも熱い涙で買はれた――ので店の方が少し新しい許り。階下が四畳半に八畳の店、二階も同じ二間いろ〳〵と料理の器具がある。二階の八畳が小篠の間と云つてもよい。そこで三味線が鳴る、長唄が唄はれる。

一、家族は六十近い驚くべく美くしい母親と、小篠、即ち二黒巳の三十四になるお富さん。妹のよつちやん(よし)確か年は十一、それに女中の出前持がひとり。弟の信太郎といふのは日本橋邊に奉公してゐる筈。お富さんには此外に二人の弟があつた。庄二郎(一八)勝三郎(一六)――庄ちやんは飛行機狂と云つてもよい位。模型を拵へては築地の水の上や日比谷や月島の廣場で飛ばしたもの。勝ちやんは文才があつて、多摩川在の親戚の葬式にいつた時の便りは私を驚かした位、番町の先生(鏡花氏)に八犬傳を買つて貰つて喜んだものだ。この兄弟は泰明小學の秀才で妹のよつちやんも此學校で級長をやつてゐる。「白鷺」で櫻ンぼうを好く年ちやんは此子である。――處が今年の二月勝ちやんが死んだ、つゞいて三月には庄ちやんが死んだ、男の子ふたりつゞいて死んだ、この悲劇も「白鷺」以後の事である

一、こゝの家號は小説では「辰巳屋」になつてゐるが實は「遠州屋」。六年前に

父なる人は死んだ、死ぬまで酒を戀しがつてゐた、天金と清新軒の先代とは飲み仲間であつたさうな、この父なる人は力士を隨分世話したもので小説でも風月堂の二階で關取が順一を押出さうとする時「辰巳家の小篠だよ」と透きとほる聲で云ふと、關取が俄かにペコ〳〵する齣がある。實は遠州屋のお嬢さんと云へば力士社會には聞えたものだから左もあらうと思はれる。

四、哀れ二年の命

同じく手記のつゞき。

一、そこでモデル詮議に移ると、伊達先生といふのが尾崎紅葉山人、それから稻木順一といふのが鏡花氏自身、紅葉館の三回忌といふのが第三回紅葉祭で、順一の祝賀の會といふのが鏡花會、その會に津川といつて出てくるのが柳川春葉氏だと思ふ、小説では順一の鏡花氏と、お篠のお富さんとが活躍してゐて、紅葉山人の伊達先生はいつも影になつて働かせられてゐる。

一、昔からいろんな人が出入する。しかし鏡花會と、お富さんが「白鷺」のモデルになつてから、更にそれが芝居になつてから、愈々出入する人が變つてきたいつたい鏡花といふ人は自分の小説が芝居になる事を嫌がる。丁度「白鷺」の舞

臺稽古の時にも、喜多村の怨望によつて番町の先生は人の後に小さくなつて見てゐた、そしてお篠のつくりが派手過ると云つて小言をくわせた。先生の詩文を隨分聞いたつもりの喜多村のお篠を見て「もつと地味でなければいけない、その女はそんな派手好みの女ぢやないから、」と云ふ、喜多村は「この上地味にしては芝居にして見られない」といふ、先生は「だから始めから余り賛成しなかつたンだ」と云ふやうな挨拶だつたといふ事を聞いた。これはお篠――お富さんの人柄を語つてゐると思ふ。

一、かういふ關係から遠州屋に時たま訪ねてくる人は菊五郎、長谷川時雨さん鏡花氏夫妻、よく手紙を寄せるのが京都にゐる喜多村のいゝ人、喜多村綠郎、池田輝方、蕉園お夫婦、鏑木清方さんなど、銀座のパン屋木村屋の娘さんは喜多村贔屓から此家に遊びに來てはお富さんの面倒を見てる。

一、お富さんの病氣は日本人で罹つた第二度目だといふ、聞き誤りかも知れないがお母さんは「バセ通し」とか云つてゐる。尾張町の先生がラヂウムを咽喉に卷いて吳るがお富さんの命を支え得る事やら、その醫者は昨年中「氣の毒だが二年位よりもつまい」と云つたとやら。……それでも時雨さんの狂言座の第一回興行

によつちやんが初めて舞臺をふむ事になつた時、舞臺ではあの人魚の舞を苦もなくやりのけたが夫れは苦勞を知らぬよつちやんの話、母さんやお富さんの苦勞は並たいていではなかつた。お富さんは病みの身でゐながら、箱根までいつて節付をしなければならなかつたお富さんは藝と思ふ人の爲めに生きてゐるのだもの、お富さんは十五六の頃から紅葉館にゐた、だから藝も其頃からしつかりしてゐた、忘れぬうちに云つて置くが、お富さんが紅葉館を出て、新地の家に隱れた時には鏡花氏は銀座とうろ覺えに聞いたのをたよりに一軒毎に聞いて廻つて三月かゝつた、迚も駄目と觀念した日、死んだ庄ちやんに道をきいたのだつた、といふ事も聞いた。

五、重なる不運

手記のつゞき

一、お父さんが亡くなつてから、お母さんは小説の文句にもある通り「見やう見眞似の御新姐料理で、間に合はせの仕出しなんぞ」して髪はふつつり切り、自分で魚河岸まで買出しにいつて、仕出し屋。そして多くの子供と病人を抱えて、お父さんが病みの頃からの借金、而も面倒な借金に苦しめられてゐる。債鬼は始

めは赤坂溜池の某から八百圓。これを拂ふ爲めに女の腕で三十圓宛、毎月拂はねばならぬ、書替に書かへ、二人の子は死ぬる、お富さんは病氣、後には其債權が芝區濱松町の東京便利興信所といふに讓渡されて督促が嚴重になつた。私はこの間を辯護士川島仟司氏やら泉先生やら電氣局の佐久間さんやらへ相談にいつた。

一、それに店の南の八疊は先頃まで天ぷら屋夫婦に貸して置いた處が其女房が滅法邪險で同情どころか差押の時など近所を觸れ廻つた、そして立退く時に遠州屋のお得意を皆もつていつて了つた。――私が五月福島に立つ時にお母さんが云つた。「愈々駄目となりましたら、およしは、時雨さんの處へ賴むつもり、お富は深川の知合ひの處へ賴みますが)と聲をひくめ(お富がイザといふ時に、みてやる者もない樣では困りますから……私は池上の本門寺にでもいつてはゐますけど、――併しお富は諦めてますよ、たゞおよしが、可愛いぢやありませんか、こんな場合になつても學校の事とお稽古の事は忘れないのですよ」――こんな際にも小說の中にある「姉弟でもきれいうよし」の年ちやんの此よつちやんを狙つてゐる思覗がゐた。私はぞつとした。

一、「白鷺」の中の五坂といふイヤな奴、小篠を手籠めにし常も順一を口惜し

がらせた奴は日本橋か南傳馬町邊にゐて、お爲ごかしを云つては遠州屋に近づかうとしてゐる、それを石を嚙るとも受けまいとお富さんが泣いてゐる。

一、私がいよ〳〵東京を去るといふ五月四日の晩、私が挨拶に行くとお母さんがわざ〳〵他家から親子をとつて振舞つてくれた。別れの爲めに二階に上ると、お富さんは寢てゐたが、お餞別に何もないからと四五寸の鞄をくれた。それが今どんなにか私の役に立つてゐる事か。

以上が手記の骨である。あとはS氏とこの家との關係が細かに書いてあるが略す。そして美くしい文章で、江戸の名殘を語るかにお富さんの三味が咽ぶ、その感想が認めてあつた。

六、意外な鏡花會員

私はこの手記と『白鷺』とを讀んで、いろ〳〵に結びつけて考へてみたが、『白鷺』の小篠の身の上は分つてゐるが、お富といふ女の事は少しもはつきりしなかつた、又Sといふ人も委しく知らぬらしい。兎に角これだけに私が見た遠州屋と、私の聞いた事だけを加へ

て此原稿を結ばうかと實は思つてゐた。ところが、たいへんよい人に會つた、而も突然の事で、日も十月の三十一日、天長祝日の夜の事。

私の知つてゐる或る官吏が、海外へ赴任するので其送別の意をかねて新橋の或る旗亭に酒を酌んだ。話は青島の事から、外交上のその人專門の事から、不圖『こん度の美人通信は何を書くかい』と聞かれたので『もう書あげさうだ、鏡花の白鷺に因んだもので……』といふと、その座にゐたAといふ藝者が目をみはつて『泉先生の！あの先生の白鷺がドウしまして？』と聞く。

私も意外に思つて、ドウして『白鷺』の事を氣にするかと訊ねると、彼は『私は泉先生の妹分になつてゐます。それに鏡花會の會員で、實は築地の濱松で私どもが開いたのがそも〳〵ですから』と云

ふ。

その藝者の名は出さないといふ事になつてゐるからAといふ頭字だけを使つて置くが、此藝者は私の質問の總てに驚いた。私も亦人が惡かつた、S氏の手記そのまゝを自分のものとして話すと、Aは餘りに私が事情に通じてゐるので目を瞻つて驚いてゐた。

『ほんとうに書いて下さい、それはいろ〳〵込み入つた事がありますの、私の事も書いて下さい、こゝでは話せませんが……お宅へ伺ひませう、江戸の女の名殘と云ひますか、ほんに行先の短いお富さんの爲めに同情して下さい。』彼は目を落した。

『お富さんは可愛さうに、もう惡いのですよ、目が飛出したやうになつてますの、寢てゐても目が出てゐますからね……あの美くしい人が、あの美くしい人が、病氣の爲めにあんなになつてますからね。』

Aは、例の遠州屋の借財の中にも入つて色々心配してゐるらしかつた。泉先生の爲めにも妹分であるが、お富さんにも妹分になると親身のやうに云つてゐた。私は『白鷺』といふ小説と此『杉本一家』とは別物にして見たい、私はS氏の如く『白鷺』のモデルは誰々なりと、はつきり定めて了ひたくはない、『白鷺』は『白鷺』――『お富さん』は『お富さん』としてみたい。

そんな事もAに云つた。

餘り遲くなるので其夜は別れた。Aは斯く原稿を書いてゐる今朝――

十一月二日の朝私の家へ來てくれる事になつてゐた。

私はいろ〳〵お富さんの數奇を極めた生涯をAの口から聞ける事を待つてゐた處が、昨日の夕方電話が掛つてきた。Aの聲で『ほんとに濟みません、大變な事が出來ましたの、私は少し體が惡

いけれども、少々の事はお富さんの爲めに我慢してお伺ひしようと思つてましたの、ところが私の實家の方に大變な事が出來ましたから昨夜からこつちに來てゐます。そのわけは何れお目にかゝる折があつたら申し上げますが……それであなたの方もお急ぎでせうから電話で御返事の出來るだけは今こゝで致しますが……』と如何にもあわてゝゐた。

十日や二十日は新橋の方にも歸れさうもないといふので私は電話で話をきいた。しかし先方は人前があるのか、返事は餘り突込んだものではなかつた。私の方が餘計に口數を費さねばならなかつた。こんな返答がある。

『泉先生の方もどんな御都合か、近頃は餘り面倒をみて下さらないやうです、今までお富さんも先生のお宅には出入してたんですが、

……それといふのも何か先生に怒られるやうな事があつたかも知れません……』

『お富さんは十六の時紅葉館にいつたのです、きれいはよし長唄はうまし、一時大變な評判だつたんですよ、それから家へ歸つて神奈川から藝者に出ました、神奈川から又横濱にいつて女中奉公をしたものです。その次が築地の濱松に女中になつて鏡花會などがあるといふ段取になりました、新橋から藝者に出た時に――高丸さんの家から藝者に出た時に小説にあつたやうな事があつたのでせう。紅葉館に二度目に出ましたが出て家にかへる時はモウ散々でした。』

『紅葉先生は知らないでせう、お富さんは……』

『泉先生もおかしかつたでせうよ。自働電話をお富さんの處へ掛けられると出る時に戸が閉つて出られないドウしても開かないのでバ

タ〳〵叩かれたが駄目、そこへ助けの神樣で開けてくれたのが先生の幼友達、而も先生の初戀の女をおかみさんにしてゐる人で、今たいへん困つてゐるといふ話をする。それを聞いて先生がお富さんにやる爲めに持つてゐられた五十圓の札を分けてやらうかと思はれたが、お富さん一家の事を考へられるとさうもならず其儘別れられた、そしてお富さんに此事を話されるとお富さんが云つた言葉が確か小説にあります。そこを讀んで下さい、お富さんといふ人はそんな人なんですから……』

電話は切れた。Aとは當分語る事が出來ない、今Aが云つた處を開いて見ると斯う書いてある。

「家内と云つて下すつたお禮に、私や貴下を男にしたい。まあ、恁ういふと、差出がましいやうだけれど、何うぞ、この、私が頂いた此のお金子は、その、本郷

で、西洋料理の屋臺を出してゐる御夫婦に立替へて上げて下さいまし。……聞けば其の御新姐は五ッになる男の兒の手を曳て、乳呑兒を抱いて居なさるッていふぢやありませんか――而して迎へに出た主人の方も、路頭にうろ〳〵してゐでせう……その御新姐が義理知らずで、あなたを棄てたのなら猶更ですわ。……私のやうな意氣地なしが、言はれた義理ぢやありません、實際欲しい。父親は內に大病だし私は體に借金ばかり、成らう事なら、小指を切つても取替へたいお金だけれど……又それだけのお金ですから其人たちに上げるのに張合があるぢやありませんか。先方が不實なら不實だけ、――そんな時には氣前を見せるもんですよ。……何のために江戸兒の情婦がついてゐます。」

私の書きたい事は、もうないやうだが、モ一つ加へたい。それは時雨氏の「美人傳」中に「小篠についてモウ一つロマンチックな物語がある」と書いてゐる事である。

鏡花會の發起人で「神田の金さん」と書いてあるが田島といふ人、逸事に富んだ人だが、今は布哇にいつてゐる。そして時々金を無名でお富さんの處へ送つてくる、正金銀行まで受取に行くのは大變だらうといふ心盡しから現金で送つてく

る。

この人は「小篠」に三年越の戀をして打明けずに失戀して、そして小篠と其戀人の爲によかれと、今でも影身になつて心配してゐる」さうである。この人が苦しい思ひを打明けなかつたのは、小篠が眞砂にゐた頃丸髷に結つてゐたから、心で戀して口には言ひ出さなかつたさうだ。うれしい話ではないか。

こゝまで書いてくると、ばァやがあわゞしく襖を開けて「死にました」といふ。きのふから瑠璃鳥と駒鳥が死にかゝつてゐたが……あゝとう〳〵死んで了つた。美くしい聲音を張らずに死んだこの二羽の小鳥を私はドコに埋めやう。――

女、女、女

終

大正四年六月廿五日印刷
大正四年七月五日發行
女、女、女
（定價金八拾五錢）
著者　小野賢一郎
東京市京橋區南鞘町廿九番地
發行者　西川[illegible]
東京市神田區表神保町二番地
印刷所　弘文堂印刷所
著作權所有
發行所　東京市京橋區南鞘町廿九番地
興成館書店
振替東京二七九八八番

奇書現る

鵜崎鷺城先生著

洋裝頗美本三百五十頁
金九十錢 送料八錢

學人の名世既に定評あり今更之を贊せんや、然れど先生が愕々たる熱論は聞けども未だ本書の如き奇拔人の頤を解き臍を抱へて笑はしむる瓢逸洒落の言を聞かず、奇言百出滑稽諧謔の內に著者一流の稜骨と本領とを以て社會人心の背裏を大膽不敵に冷嘲熱罵し奇警の觀察眼は烱々として何ものも逃さず、而かも其眼孔に映ぜしものは縱橫無盡、深刻輕妙の筆を呵して止まず絕大の好評を以て迎へられつゝある本書の價値は一本を備へて始めて知る！

鳥の目だま

內容の一部分

早稻田の女王、飛んだ關稅政策、井上家の相續嫁、保名の崇、沼間の卑吝は病的、婆婆に用の有る體、華族になれば土左衞門、一種の建築法、九州兩探題、お胤頂戴、中島湘煙女史、兆民の傾倒せし人物、奠南と雲梯、梅博士の先手、雅號の出處、生きた幽靈、文豪の末路、床入りの質問、迷信と義太夫、禿頭は馬の罰、危機一髮、ベランメーは希臘語、名士も故鄕では駄目、日本の美人系、寢言と禿頭、新聞界の奇物、藪をつゝいて蛇、日本一の大頭、花魁の放生會、煙草好の兄弟、前からもスッポン、漫性的敗將、毛色の變つた尾崎一族、奇拔なる宣言、流石の大隈も困る、棺前で徹夜の大議論、兩堂の惡戲、未來記と佳人の奇遇、櫨兵衞の力自慢、鈍鈍の喧嘩、女尊男卑の實行、スナハチ演說、妻君自慢、明石中將の煽動費、米國の敵を日本、骨食人種、珍妙なる斷案、目鼻のない男、車上の演說、親分の褌袍、一力の女將、支那豪傑の討死、

芳賀博士序文、坪谷水哉先生校訂

美洋裝小形三百頁
本實寫々眞數十葉入

小中村清象先生著

傳說の山水と傳說の美人

近く現る

定價 80錢
送料 8錢

海へ!! 山へ!! 行く人よ

▼必ず一本を携へて興味旅情を掬し給へ▲

足立栗園先生著

大好評

立世要道

實驗心身鍛練法

洋裝美本
木版數個入
金六十五錢
送料八錢

本書は調心術胎息法養氣法及び靜坐法等の精神的療法と運動沐浴睡眠房事其他の生理療法及食物療法の各方面より精力を增進し病根を一掃し兼て活動し得る秘訣を詳說せるもの也、故に奮鬪を繼續し長命せんとする士、病弱執務に堪へざる人精神に若悶ある人は本書を繙きて長命の秘訣を知れ

是れ足立先生が多年實驗の結果にして何人たりと雖も必ず實行し得らるゝ名著也

疑ふ勿れ

諸君が立世上必須なるあらゆる精力增進の眞諦は收めて此一卷にあり!!!

鵜崎鷺城先生著

野人の聲

洋裝函入頗美本
定價金壹圓
送料金八錢

最新刊

政界の事情紛糾に紛糾を重ね今日の正論の士も明日を期す可らす、昨の變節漢は今日の救世主と評さるゝ時に當つて、策に依つて此間を潜り、綺言を以て一世を瞞過せんとするもの甚だ鮮ならず、論壇の闘將、鵜崎鷺城先生、これ等不正不義の變節漢の非行を直載快斷よく人道の正義と現代の國情に徵して論破せらる、其言や豪々其論や堂々皆肺肝より出でて至誠至情の血肉を湧かしめ、貴人王侯も爲に顏色なからしむ、今や政界の中心たる大隈伯、加藤男、尾崎愕堂、犬養毅、犬石正巳、武富時敏、一木文相、原敬、黑岩周六、寺內伯、八代六郎、若槻禮次郎、其他數百人の言行本紙上に活躍す!!是れ實に先生が熱血を注ぎて衷心を發露せられたる一大快著にして苟しくも國を思ふの士は擧て必讀すべき現代唯一の活文字也矣!!

少年文學 大正お伽文庫

文學士 得水庵先生著

洋製頗美本函入
木版画十數葉挿入

定價金六拾五錢

やっこれだ

僕等が第一番に讀みたい本はためになつて面白くそして愉快な——

なんど讀んでもあきない
痛快なお噺しばかり！

此本は皆さん御存じの有名な得水庵先生が今までに西洋や日本の面白いはなしばかりを澤山にあつめて今度やつとできたのでそれはそれは愉快な本で本の中には實に美しい画をたんと入れてあります
かから讀みながら其画を見るとまるで自分が天へ上つたり山の中を行くやうで其面白さと云つたら實にほかの本では見られません
まつたく此本さへあればお供だちは一人もいりません

東京市京橋區南鞘町
興成館書店
振替東京二七九八八番

270
964

終